



聖金ロイオアンの

聖体礼儀

主日奉事式

名古屋ハリストス正教会

2011年6月



目 次

＋奉獻礼儀	
＋聖体礼儀	
大連禱.....	1
第一アンティフォン.....	2
小連禱.....	3
第二アンティフォン.....	4
小連禱.....	5
第三アンティフォン.....	6
小聖入.....	6
聖三の歌.....	10
ポロキメン.....	11
使徒經の読み.....	12
福音經の読み.....	13
重連禱.....	14
大聖入「ヘルビムの歌」.....	17
増連禱.....	19
信經.....	20
安和の憐み.....	21
常に福.....	23
増連禱.....	25
天主經.....	26
領聖詞.....	27
領 聖.....	28
感謝の祈りと退出.....	30
領聖感謝祝文.....	32

聖金ロイオアンの聖体礼儀

【ことばの礼儀】【啓蒙者の礼儀】¹

輔祭 君や、祝讃せよ、

司祭 父と子と聖神の国は崇め讃めらる今も何時も世に²、

(詠)「アミン」

<復活祭期は「アミン」に続いてパスハのトロパリ「ハリストス死より復活し」3次>

大連禱³

輔祭 我等安和にして主に禱らん、

(詠) 主 憐めよ⁴

輔祭 上より降る安和と我等が^{たましい}霊の救いのために主に禱らん、

輔祭 全世界の安和神の聖なる諸教会の堅立、及び衆人の合一のために主に禱らん、⁵

輔祭 此の聖堂、及び信と慎みと神を畏る心とを以て、此に来る者のために主に禱らん、

輔祭 教会を司る我等の主教(某)、司祭の尊品、ハリストスに因る輔祭職、^{ことごと}悉くの教衆、及び衆人のために主に禱らん⁶、

輔祭 我が国の天皇及び国を司る者のために主に禱らん⁷、

輔祭 此の都邑と凡の都邑と地方、及び信を以て、此の中に居る者のために主に禱らん⁸、

輔祭 気候順和、五穀豊饒、天下泰平のために主に禱らん⁹、

輔祭 航海する者、旅行する者、病を患うる者、^{かんなん}艱難に遭うる者、^{とりこ}虜となりし者、及び彼等の救いのために主に禱らん¹⁰、

¹ 聖体礼儀の前半は「ことばの礼儀」と呼ばれる。前半の焦点は「聖書の読み」にあるので、前半部分は聖書に基づいた歌が多い。

² 「父と子と聖神の(マタイ 28:19) 国は崇め讃めらる(マルコ 11:10)」。

「爾の聖者は爾を崇め讃めん、願わくは爾の国の光栄を傳え、爾の能力を宣べん、人の諸子に爾の能力と、爾の国の光栄なる威厳とを知らしめん為なり。爾の国は永遠の国、爾の宰制は萬世に迄らん。(聖詠 145:11-13)」

「このように、わたしたちは揺り動かされることのない御国を受けているのですから、感謝しよう。感謝の念をもって、畏れ敬いながら、神に喜ばれるように仕えていこう。(ヘブル 12:28)」

³ 大連禱は初代教会では「共同の祈り」と呼ばれ、クリスチャンの共同体が各地にいるクリスチャン各人のために祈った。他の説もある。

⁴ 「主憐れめよ」は連禱の祈願への我々の共通の応答。神に私たちの祈りと願いが聞き届けられるように乞う。聖詠のどれを読んでも、神の民は神の憐れみを恒に祈り続けている(聖詠 116:1、143:1)。福音書ではイイススに憐れみを乞いに来た人についての記述は7回あるが、イイススはそのたびに願いに応えた。

⁵ 安和=平和:「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。…心を騒がせるな。おびえるな。(イオアン 14:27)」「すべての人との平和を、また聖なる生活を追い求めなさい。(ヘブル 12:14)」

⁶ 「あなたがたに神の言葉を語った指導者たちのことを、思い出しなさい。(ヘブル 13:7)」

⁷ 「願いと祈りと執り成しと感謝とをすべての人々のためにささげなさい。王たちやすべての高官のためにもささげなさい。わたしたちが常に信心と品位を保ち、平穩で落ち着いた生活を送るためです。(1 テモテ 2:1-2)」

⁸ 「町の平安を求め、その町のために主に祈りなさい。その町の平安があつてこそ、あなたたちにも平安があるのだから。(エレミヤ 29:7)」

⁹ 「春の雨の季節には、主に雨を求めよ。主は稲妻を放ち、彼らに豊かな雨を降らせ、すべての人に野の草を与えられる。(ゼカリヤ 10:1)」

¹⁰ あなたがたの中で病気の方は、教会の長老を招いて、主の名によってオリーブ油を塗り、祈ってもらいなさい。信仰に基づく祈りは、病人を救い、主がその人を起き上がらせてくださいます。(ヤコブ 5:14-15) 自分も一緒に捕らわれているつもりで、牢に捕らわれている人たちを思いやり、また、自分も体を持って生きているのですから、虐待されている人

輔祭 我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るがために主に禱らん¹¹、

輔祭 神や、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、¹²

輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん¹³、

(詠) 主 爾に

司祭

第一偈和詞の祝文

主我が神や、爾の権柄は象り難く、光栄は測り難し、爾の仁慈は限り無く、仁愛は言い難し、求む主宰や、爾の慈憐に因りて、親ら我等と此の聖堂とを眷み、我等及び我等と偕に禱る者に爾の豊なる恩沢と爾の愛憐とを施し給え、¹⁴

(高声) 蓋凡そ光栄尊貴伏拝は 爾父と子と聖神に帰す、今も何時も世世に¹⁵、

(詠) 「アミン」

第一アンティフォン¹⁶

主日：第 102 聖詠から (一調 真福九端と同じメロディ)

<主宰の祭日は祭のアンティフォンに変わる>

(詠) 右列 我が霊よ、主を讃め揚げよ、主よ、爾は崇め讃めらる、

右列 我が霊よ、主を讃め揚げよ、我が中心よ、其の聖なる名を讃め揚げよ。

左列 我が霊よ、主を讃め揚げよ、彼が悉くの恩を忘るる母れ、

右列 彼は爾が諸々の不法を赦し、爾が諸々の疾を療す、

たちのことを思いやりなさい (ヘブル 13:3)」

11 「我嘗て主を尋ねしに、彼は我に聆き納れて、我が総ての危うきより我を免れしめ給えり (聖詠 33:4)」

12 「神、我等の救主よ、爾の名の光栄に因りて我等を助け給え、(聖詠 78:9)」

13 「生神女」はギリシア語のテオトコス (神を生む者) の訳。聖体礼儀を通してイイススの母マリヤは生神女と呼ばれる。神の子をその胎に宿したから。「このようにおびたしい証人の群れに囲まれている。(ヘブル 12:1)」

14 祝文の多くは至聖所で司祭が黙唱するが、聖体礼儀祈りの本質はここにある。黙唱祝文の意味を理解して、「アミン」(そのとおりになりますように) と応える。

「萬軍の神よ、面を返し、天より臨み観て、斯の葡萄園に降り、爾が右の手の植え付けし者と、爾が己の為に定めし芽とを護り給え。(聖詠 78:14-15)」

15 正教会のすべての祈りは神への光栄を表す「光栄は・・・(ドクソロジー)」で終わる。「偉大さ、力、光輝、威光、栄光は、主よ、あなたのもの。まことに天と地にあるすべてのものはあなたのもの。主よ、国もあなたのもの。あなたはすべてのものの上に頭として高く立っておられる (1 歴代誌 29:11)」

16 アンティフォンは今日ではあまり行われていないが、旧約時代からある古い歌い方で、ビザンティンでは聖堂に向かう行列の歌だった。本来左右二つの詠隊 (または聖歌者) に分かれて交互に歌う。

左列 ^{なんじ} 爾の生命を墓より救い、^{なんじ} 憐と恵とを 爾に冠らせ、
 右列 幸福を 爾の望に飽かしむ、^{なんじ} 爾が若復さること驚の如し、
 左列 主は凡そ迫害せらるる者の為に義と審判とを行う。彼は己の途をモイセイに示し、己の作為をイ
 ズライリの諸子に示せり、
 右列 主は宏慈にして矜恤、寛忍にして鴻恩なり、
 左列 怒りて終あり、憤りを永く懐かず、我が不法に因りて我等行はず、我が罪に因りて我等に報いず、
 右列 蓋天の地より高きが如く、斯く主を畏るる者に於ける其憐は大なり、
 左列 東の西より遠きが如く、斯く主は我が不法を我等より遠ざけたり、
 右列 父の其の子を憐れむが如く、斯く主は彼を畏るる者を憐れむ、
 左列 蓋彼は我が何より造られしを知り、我等り塵なるを記念す、
 右列 人の日は草の如く、其の栄ゆること田の華の如し、
 左列 風之を過ぐれば無きに帰し、其の有りし處も亦之を識らず、
 右列 唯主の憐れみは彼を畏るる者に世より世に至り、
 左列 彼の義は其の約を守り、其の誠めを懐いて、之を行う子々孫々に及ばん、
 右列 主は其の寶座を天に建て、其の国は萬物を統べ治む。
 左列 主の諸々の天使、能力を具へ、其の聲に遵いて其の言葉を行う者よ、主を讃め揚げよ。
 右列 主の ^{ことごと} 悉くの軍、其の旨を行う役者よ、主を讃め揚げよ。
 左列 凡そ主の ^{ことごと} 悉くの造工よ、其の一切治むる處に於いて主を讃め揚げよ。

右列 光栄は父と子と ^{せいしん} 聖神に帰す、
 左列 今も何時も世世に、「アミン」
 右列 我が ^{たましい} 霊よ、主を ^{ほあ} 讃め揚げよ。我が中心よ、その聖なる名を ^{ほあ} 讃め揚げよ。
 主よ、^{なんじ} 爾は ^ほ 崇め讃めらる。

小 連 禱

輔祭 我等復又安和にして主に禱らん¹⁷、 (詠) 主 憐めよ
 輔祭 神や、^{なんじ} 爾の恩寵を以て、我等を ^{たす} 助け救い ^{まも} 憐み護れよ¹⁸、 (詠) 主 憐めよ
 輔祭 至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光栄の女宰・^{しょうしんじょ} 生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記
 憶して¹⁹、我等己の身及び互に各の身を以て、并に ^{ことごと} 悉くの我等の ^{いのち} 生命を以て、ハリストス神
 に委託せん、 (詠) 主 ^{なんじ} 爾に

司祭

第二倡和詞の祝文

17 「またまた」ということばは絶え間ない祈りを表す。ルカ 18:1-8 の執拗に頼み込んだ女のたとえ話を思い出そう。
 18 「爾の愛する者の助けを獲ん為なり、爾が右の手にて救いて、我に聴き給え。(聖詠 107:6)」
 19 「こういうわけで、わたしたちもまた、このようにおびたしい証人の群れに囲まれている以上、すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか、信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。このイエスは、御自身の前にある喜びを捨て、恥をもちとわないで十字架の死を耐え忍び、神の玉座の右にお座りになったのです。(ヘブル 12:1-2)」

主我が神や、爾の民を救い、及び爾の嗣業に福を降し、爾が教会の充滿を守り、爾が堂の美なるを愛する者を聖にせよ、爾が神聖の力を以て彼等を光榮し、我等爾を待む者を遺す勿れ、²⁰

(高声) 蓋権柄及び国と権能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、

(詠)「アミン」

第二アンティフォン

(主日 145 聖詠) (主宰の祭日は祭のアンティフォンに変わる)

<一調 第1アンティフォンと同じ>

(詠) 左列 光榮は父と子と聖神に歸す。

我が靈よ、主を讚め揚げよ。我生ける中主を讚め揚げよ、

我存命中 吾が神に歌わん。

右列 牧伯による母れ、救う能はざる人の子による (を待む) 母れ。

左列、 彼氣絶ゆれば土に歸り、

凡そ 彼が謀る所は 即日消ゆ。

右列、 イアコフの神にたす佑けらるる人は福なり。
左列、 主神、即天地と海と凡そ其中に在る物とを造り、永く眞実を守り、
右列、 窘迫せらるる者の為に判をなし、飢うる者に糧を與うる主を待む人は福なり。
左列 主は囚人を釋き、主は瞽者の目を開き、主は屈められし者を起し、主は義人を愛す。
右列 主はまも羈客を護り、孤子と寡婦とをたす佑け惟不虔者の途を覆へす。

左列 主は永遠に王とならん、シオンよ、爾の神は 世世に王とならん。

<(カッコ)は聖詠經による。聖詠經と歌詞が一部異なる>

(詠) (第六調) 今も、何時も世世に「アミン」。²¹

²⁰ 「わたしたちの救い主である唯一の神に、わたしたちの主イエス・キリストを通して、栄光、威厳、力、権威が永遠の昔から、今も、永遠にいつまでもありますように、アーメン (ユダ 1:25)」

「主よ、わたしたちの神よ、あなたこそ、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方。あなたは万物を造られ、御心によって万物は存在し、また創造されたからです。(黙示 4:11)」

「偉大さ、力、光輝、威光、栄光は、主よ、あなたのもの。まことに天と地にあるすべてのものはあなたのもの。主よ、国もあなたのもの。あなたはすべてのものの上に頭として高く立っておられる (1 歴代誌 29:11)」

²¹ 「神の独生の子」は 535 年頃、皇帝ユスティニアヌスによって書かれたと言われる。イエスが神の独生子で、神ことばであるというキリスト教の教義が簡潔に歌われる (イオアン 1:1-14)。

神の独生の子 並びに言よ、

死せざる者にして、我等を 救はんために 甘じて 聖なる生神女、永貞
童女マリヤより 身を取り、

〔神の〕性を易えずして 人と為り、十字架に釘うたれ、

死を以て 死を踏み破りし ハリストス神よ、

聖三者の一として、父 及び 聖神と共に 讃栄せらるる主よ、
我等を 救い給え。

小 連 禱

輔祭 我等復又安和にして主に祷らん、 (詠) 主 憐めよ

輔祭 神や、爾の恩寵を以て、我等を 助け 救い 憐み 護れよ、 (詠) 主 憐めよ

輔祭 至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光荣の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並びに 悉く 我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、 (詠) 主 爾に

司祭

第三偈和詞の祝文²²

我等に此の公同和合の祈禱を賜い、かつて二三人爾の名に依りて集まる者にもその求むる所を賜うを約せし主や、爾親ら今も爾が諸僕の願いをその利益のために応はしめて、我等に、今世には爾の真理を識り、来世には永遠の生命を得るを賜え、

(高声) 蓋 爾は善にして人を愛する神なり、我等光荣を 爾 父と子と 聖神に献ず 今も何時も世々に、

(詠) 「アミン」

(至聖所：王門がひらき、小聖入に備える。)

²² 「また、はっきり言うておくが、どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心をつにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる。二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。(マタイ 18:19-20)」

「神は、すべての人々が救われて真理を知るようになることを望んでおられます。(1テモテ 2:4)」

「玉座に座っておられる方と小羊とに、賛美、誉れ、栄光、そして権力が、世々限りなくありますように(黙示 5:13)」

第三アンティフォン²³

<日曜日は「真福九端」、主宰の祭日には祭日のトロパリと聖詠の句²⁴>

- (詠) 右列 主よ、爾の国に来らん時^(於て)²⁵ 我等を 憶い給え。
- 心^(神)の貧しき者は 福なり²⁶、天国は 彼等の有なればなり。
- 左列 泣く者は 福なり、彼等 [は] 慰を得んとすればなり。
- 右列 溫柔なる者は 福なり、彼等 [は] 地を嗣がんとすればなり。
- 左列 義に飢え渴く者は 福なり、彼等 [は] 飽くを得んとすればなり。
- 右列 矜恤ある者は 福なり、彼等 [は] 矜恤を得んとすればなり。
- 左列 心の清き者は 福なり、彼等 [は] 神を見んとすればなり。
- 右列 和平を行う者は 福なり、彼等 [は] 神の子と名づけられんとすればなり。
- 左列 義のために 窘遂せらるる者は 福なり、天国は 彼等の有なればなり。
- 右列 人我のために 爾等を 詬り 窘遂し、爾等の事を 譏りて 諸の悪しき 言を言はん時は、爾等 福なり。
- 左列 喜び楽しめよ、天には 爾等の 賞多ければなり。
- (右列 光栄は父と子と聖神に帰す、)
- (左列 今も何時も世々に、「アミン」。)

小聖入²⁷

(司祭輔祭宝座の前に立って躬拝三回。 司祭は聖福音経を輔祭に渡す。28右を回って宝座の後側を通り、北門より出て、小聖入を行う。堂役のロウソクが先導。輔祭司祭王門の前に立ち、首を屈め)

²³ 第3アンティフォンはしばしば「真福詞」と呼ばれ、ハリストスが教えられた真の「幸い」の本質を表す。

²⁴ 本来は、真福詞を九句に分けて、間に八調経に記載される真福詞のステイヒラを挟み込んで歌われた。現在ではステイヒラが省略されたために、最後の「光栄は」「今も」も歌われなくなった。主宰の祭日には聖詠などから選ばれた句の間にトロパリを附唱として挟み込んでくり返す。

²⁵ () 接続歌集による

²⁶ 「霊に満たされ、詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい。(エペソ 5:18)」

²⁷ 「来りて主に歌い、神我が救いの防固に呼ばん、讃揚を以て其の顔の前に進み、歌を以て彼に呼ばん。来たれ叩拝俯伏して、主我が造物主の顔の前に膝を屈めん、(聖詠 95:1、6)

²⁸ 迫害時代、聖書は見つからないように隠してあった。聖入はその「福音経」が実際に教会に運び込まれる時であった。今聖入によって当時を思い出すとともに、「神の国」へ入りたいという我々の願いを表す。

ビザンティン時代では、アンティフォンは総主教や皇帝とともに、聖堂に向かう市中行列だった。聖堂前に到着し、その日のテーマであるトロパリを何度も歌い、「聖入」の歌とともに、聖堂へ全員が入っていった。「聖入」は文字通り「神の国」への入場であった。

輔祭 主に禱らん、(司祭下記の祝文を黙誦)
司祭

小入祝文

主宰・主・我等の神諸天に神使及び神使首の品級と軍隊とを立てて、爾が光栄の奉事者となし者や、求む、我等の入るに伴いて、彼の我等と偕に努め、共に爾の至善を讃栄する聖神使等の入るを致させ給え、

(高声) 蓋凡そ光栄尊貴伏拝は 爾 父と子と聖神に帰す、今も何時も世世に、

(輔祭は司祭に向って、右手で東を指し、三本指で大帯をとって)、

輔祭 君や、聖入に祝福せよ、

司祭 (十字を描いて) 爾の聖者の入るは恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、

輔祭 「アミン」

(輔祭は、聖務長、主教に近づいて福音経に接吻させる。司祭一人の場合は、司祭が接吻。第3アンティフォンを歌い終わると、輔祭王門の下で司祭の前に立って、わずかに両手を挙げ聖福音経を掲げて、高声)

輔祭 睿智、肅みて立て、

(輔祭躬拝し、司祭もその後で躬拝して至聖所に入る、輔祭は聖福音経を宝座に置く)

(詠) 来れ ハリストスの前に 伏し拝まん、²⁹

神の子、死より復活せし主や、³⁰

(生神女の祭日 生神女の祈禱によって)

(聖人の祭日 聖人に厳かに現る主や)

我等 爾に「ア ril イヤ」を 奉る者を 救い給え、

²⁹ 「来たれ、ハリストスの前に伏し拝まん」ハリストスの前に伏拝するように呼びかけている。

「ダビデが全会衆に、『あなたたちの神、主をほめたたえよ』と言うと、会衆は皆、先祖の神、主をほめたたえ、主の御前と王の前にひざまずいて拝した。(1歴代誌 29:20)」

「あなたがたが近づいたのは、シオンの山、生ける神の都、天のエルサレム、無数の天使たちの祝いの集まり、……あなたがたは、語っている方を拒むことのないように気をつけなさい。(へブル 12:22 25)」

³⁰ 生神女の祭日は「生神女の祈禱によって」、聖人の祭日には「聖人に厳かに現る主よ」。主宰の祭日は祭を表すことばが挿入される。

トロバリ³¹ 主日復活讃詞 (祭日は祭日のトロバリとコンダク)³²

第一の調

救世主や、イウデヤの人墓を封じて 兵卒なんじ爾いさぎよの 潔みき軀を守る時、
爾なんじは三日目に復活して 世界いのちに生命を賜えり、
故に、天軍は爾なんじ生命を施すの主いに呼んで曰う、
ハリストスや、光栄は爾なんじの復活に帰し、光栄は爾なんじの国に帰す、
ひとり人ひとを慈いつくしむの主なんじや、光栄は爾なんじの 慮おもんばかりに帰す。

第二の調

死せざる生命いのちや、爾なんじ死に降りし時、神の性の光にて 地獄じごくを殺せり、
死せし者を地下より復活せしめし時、天軍 皆 呼んで曰えり、
生命いのちを賜うの主 ハリストス 吾が神や、光栄は爾なんじに帰す。

第三の調

天に在る者あ樂めよ、地に在る者よるこ悦べよ、
主は 其ひじの臂あらかの力を踏もつして、死を以て死を亡ほろぼし、復活はじめの首となり、
我等じごくを地獄の腹より救い、世界おおいに大なる憐れみを賜えばなり。

第四の調

主の女弟子は 復活の光る音おとづれを
神の使いより聞き受けて、元祖がんそよりの定罪ていざいを振り棄て
使徒しとに誇りて曰えり、死は亡されハリストス神は復活して 世界たまに大なる憐
れみを賜えり。

第五の調

信者や、父と聖神せいしんと共に始ことばなき言、吾が救いためのために
童貞女どうていじょより生れし者を 讃ほめ歌うて捧むべし、
彼あま甘んじてその身にて十字架に上り、
死しのを忍び、その光栄の復活にて 死せし者を復活せしめ給えばなり。

³¹ トロバリとはその日のテーマを表す歌。主日であれば、その週の調の復活トロバリ（とコンダク）が歌われる。八つの調とは八週間で一周するサイクルのこと。祭日、聖人には祭日や聖人をたたえるトロバリ（とコンダク）が歌われる。主日や祭日が重なった場合には両方歌う。日本ではコンダクが省略されていることが多い。

³² 複数のトロバリとコンダクなどのつなげ方。

- トロバリ2つとコンダクの場合 **トロバリ** + 「光栄は」**トロバリ**+ 「今も」**コンダク** トロバリが3つ以上ある時は、最後のトロバリの前に「光栄は」、コンダクの前に「今も」をつける。
- トロバリとコンダクの場合 **トロバリ** + 「光栄は」「今も」**コンダク**
- トロバリ二つのみの場合 **トロバリ** + 「光栄は」「今も」**トロバリ**

第六の調

神使の軍、爾なんじの墓はかに現れしに 番兵死せる者の如し、
マリヤ墓はかに立ちて 爾なんじの 潔いさぎよき体を尋ねり、
爾なんじは 地獄いぢなに誘われずして 地獄とりにを虜にし、生命いのちを賜うて処女に逢い給えり、
死より復活せし主や、光栄は爾なんじに帰す

第七の調

ハリストス神や、爾なんじは十字架ほろぼにて死を亡し、
盗賊とうぞくのために 天堂てんどうを開き、携香女けいこうじよの悲しみを慰め、
使徒しとに 爾なんじが復活して世界に大なる憐れみを賜いしを伝えさせ給えり

第八の調

恵み深き主や、爾なんじは高きより降り、
三日の葬りを受けて 我等を苦みよりと釈き給えり、
吾が生命いのちと復活なる主や、光栄は爾なんじに帰す

○光栄は父と子と聖神せいしんに帰す、

聖堂のトロパリ たとえば名古屋では神現祭のトロパリ-----

主よ、爾がイオルダンに洗を受くる時、聖三者の敬拝は顕れたり、
蓋父の声、爾を證して至愛の子と名づけ、聖神せいしんも鳩はとの形に顕れて言ことばの確なるを示せり。
現れて世界を照ししハリストス神よ、光栄は爾に帰す。

◎今も何時も世々に「アミン」

使徒 大主教 聖ニコライのトロパリ 4調

使徒と等しく同座なる者、忠実にして神智なるハリストスえきしやの役者、
聖なる神しんに選ばれたるふえ笛、ハリストスの愛に満ちたるうつわ器、
我が国の光照者 使徒（大）主教聖ニコライよ、
爾なんじの牧群ぼくぐんのため、及び全世界のために、生命いのちを保つ聖三者に祈り給え。

(トロパリの終わる頃)

輔祭 (三指でオラリをとり、首を屈めて司祭に向かって)、君や、聖三の時に祝福せよ、

司祭 (十字を描いて) 蓋我が神や、爾なんじは聖なり、我等光栄を爾なんじ父と子と聖神せいしんに献ず、今も何時も、
(トロパリを歌い終わったら、輔祭王門を出でて王門前に立ち、オラリでハリストスのイコンを指して)

<輔祭のいるときだけ>

輔祭 主や、敬虔なる者を救い、及び我等に聆き給え、

(詠) 主や、敬虔なる者を救い、及び我等に聆き給え、

輔祭 (会衆をぐるっと指し示し、高声)、世世に、

聖三の歌³³

<特別の祭日には「聖三の歌」は「ハリストスによって洗を受けしもの」など変わる。>

(詠) 「アミン」

右列 聖なる神、聖なるゆうき勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

左列 聖なる神、聖なるゆうき勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

右列 聖なる神、聖なるゆうき勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

左列 光栄は父と子と聖神せいしんに帰す、今も何時も世々にアミン、

聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

右列 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

司祭 聖三を歌う時の祝文 -----

聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の声を以て歌頌せられ、ヘルビムより讃栄せられ、ことごと悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸のたまもの賜を以て之を飾り、願う者に智慧と明悟とを与え、罪を行う者を棄てずして、その救いのために痛悔を立て、我等卑しくて不当なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖なる祭壇の光栄の前に立ちて、爾に当然の伏拝讃栄を奉るに堪うる者となし主宰や、爾親みづから我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我がたましい霊と体とを聖にし、我等に生涯善功を以て爾に努むるを得せしめ給え、聖なるしょうしんじよ生神女と古世より爾の喜を為し、諸聖人との祈祷に依りてなり、蓋我が神や、爾は聖なり、我等光栄を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、

(聖三の歌のとき、司祭左の祝文を黙誦し、司祭輔祭も聖三祝文を三回誦する、宝座の前に躬拝三回)、

輔祭 (嗣ぎて輔祭は司祭に向いて)、君や、命ぜよ (二人高処に行く)

司祭 主の名に依りて来る者は崇め讃めらる、

輔祭 君や、高座に祝福せよ、

³³ 「聖三の歌」はギリシア語で「トリサギオン」三つの聖なるものの意。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能者である神、主、かつておられ、今おられ、やがて来られる方。(黙示 4:8)」、「高く天にある御座に主が座しておられるのを見た。……セラフィムが……、唱えた。「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地をすべて覆う。……王なる万軍の主 (イザヤ 6:3)」

私たちは神の民の集まりにあって神のことばを聞く準備をする。これが単に人間が神について語ったことばではなく、まさに神のことばであることを思い起こす。私たちは、今、神が私たちに話しかけることばを聞くのだ。だからこそ、天使の歌「聖、聖、聖なるかな」を歌う。

司祭 ヘルビムに坐する者や、爾は其国の光榮の宝座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、

ポロキメン³⁴

輔祭 (聖三祝文を歌い終わると、輔祭王門の前に行き) 慎みて聴くべし、

司祭 衆人に平安、³⁵

誦経 ^{なんじ} 爾の神にも、

輔祭 睿智、

誦経 本日の提綱 (ポロキメン) を誦す、

主日提綱 (ポロキメン) (祭日の時は祭日のポロキメン)

第一調 主よ、我等^{なんじ}爾を頼むが如く、爾^{なんじ}の憐れみを我等^たに垂れ給え。

(句) 義人よ、主のために喜べ、讃榮するは義者に適う。

第二調 主は我が力、我が歌なり、彼は我が救いとなれり。

(句) 主は厳しく我を罰したれども、我を死^{わた}に付さざりき。

第三調 我が神に歌い歌えよ、我が王に歌い歌えよ。

(句) 萬民よ、手を拍ち、歓びの声を以て神に呼べ。

第四調 主を^{なんじ}爾の工業^{しわざ}は何ぞ多き、皆智慧^{ちえ}を以て作り。

(句) 我が^{たましい}靈よ、主を讃め揚げよ、主我が神よ、^{なんじ}爾は至りて大なり。

第五調 主よ、^{なんじ}爾は我等を保ち、我等^{まも}を護りて、この世より永遠に至らん。

(句) 主よ、我を救い給え、蓋義人は絶えたり。

第六調 主よ、^{なんじ}爾の民を救い、^{なんじ}爾の業に福^{くだ}を降し給え。

(句) 主よ我^{なんじ}爾に呼ぶ、我の防固よ、我がために黙す母れ。

第七調 主はその民に力を賜い、主はその民に平安の福^{くだ}を降さん。

(句) 神の諸子よ、主に献ぜよ、光榮と尊貴とを主に献ぜよ。

第八調 主^{なんじ}爾等^{ちか}の神に誓^ないを作して償^{つぐな}えよ。

(句) 神はイウデヤに知られ、その名はイズライリに大いなり。

³⁴ ポロキメンは字義的には「テキストに先立つ」の意。聖詠からとられた句で続く聖書の読みの紹介をする。ただし、祭日以外は八調で一巡りのポロキメンが歌われるので、続く聖書の読みの内容とは直接関係しない。

³⁵ 聖体礼儀を通して、ハリストスが弟子たちに願ったのと同様に、司祭は「平安」を人々に祈願する。「イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。(ヨハネ 20:19)」

使徒経の読み³⁶

輔祭 睿智、
誦経 聖使徒パウエルが 로마人（コリント人、ガラテヤ人など）に達する書の読み
輔祭 謹みて聴くべし、
誦経 使徒経を読む
司祭 爾に平安、
誦経 爾の神にも、
輔祭 睿智、
誦経 「アレルイヤ、アレルイヤ、アレルイヤ」

（詠）アレルイヤ、アレルイヤ、アレルイヤ³⁷

第一調 「アレルイヤ」、願くは我がために仇を復し、我に諸民を従わしむる神は讃頌せられん。

（句）大なる救いを王に施し、憐を爾の膏つけられし者ダヴィド、及びその裔に世世に垂るる者よ、我爾の名に歌はん。³⁸

第二調 「アレルイヤ」、願くは主は憂の日に於て爾に聴き、イアコフの神の名は爾を扞ぎ衛らん。

（句）主よ王を救え、又我等が爾に呼ばん時、我等に聴き給え。

第三調 「アレルイヤ」、主よ、我爾を恃む、願わくは我世世に羞を得ざらん。

（句）我がために堅固なる避所となりて、我に常に隠るるを得しめ給え。

第四調 「アレルイヤ」、神よ、爾の宝座は世世に在り、爾の国の権柄は正直の権柄なり。

（句）爾は義を愛し、不法を悪めり。

第五調 「アレルイヤ」、主よ、我永く爾の慈憐を歌い、我が口を以て世世に爾の眞実を伝えん。

（句）蓋我言う、慈憐は永く建てられたり、爾は爾の眞実を天に固めたり。

第六調 「アレルイヤ」、至上者の覆いの下に居る者は、全能者の蔭の下に安んず。

（句）主に請う、爾は私の避所、私の防禦、我が頼む所の私の神なりと。

第七調 「アレルイヤ」、至上者よ、主を讃榮し、爾の名に歌うは美なる哉。

（句）爾の憐れみを朝に宣べ、爾の誠を夜に宣ぶるは美なる哉。

第八調 「アレルイヤ」、来りて主に歌い、神我が救の防固に呼ばん。

（句）讃揚を以てその顔の前に進み、歌を以て彼に呼ばん。

³⁶ 正教会では聖書を読む箇所が教会暦で定められている。「かつて書かれた事柄は、すべてわたしたちを教え導くためのものです。それでわたしたちは、聖書から忍耐と慰めを学んで希望を持ち続けることができるのです。（ローマ 15:4）」

³⁷ アレルイヤは「神を讃めたたえる」の意。神の言葉を聞く期待と神との交わりとに入っていく喜びの表れである。各人は霊と喜びの歌を歌う。新旧約聖書にあるように、礼拝の時、クリスチャンは捧げものと神の臨在の印として香を焚く。香炉の煙は聖人の祈りとともに神の面前に昇ってゆく。「香の煙は、天使の手から、聖なる者たちの祈りと共に神の御前へ立ち上った（黙示 8:3-4）。」

³⁸ 日本では「アレルイヤ」の句は唱えられないことが多い。アレルイヤは本来福音のポロキメンとなっており、句を挿入しながらその日の調で「アレルイヤ」を3回歌うのが本式。

（「アリアルイヤ」を歌う時、輔祭香炉をとって、乳香を焚き、司祭に祝福を受けて、炉儀を宝座の四方、至聖所と司祭の前に行う）

司祭

福音経の前の祝文-----

人を愛する主宰や、我が心に神を知る智慧の淨き光を輝かし、我が思念の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を畏る畏をも入れて、我等がことごと悉くの肉体の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神や、爾は我がたましい「靈」と体との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にして生命いのちを施す爾の神とに光栄を献ず、今も何時も世世に「アミン」³⁹

福音経の読み⁴⁰

（輔祭香炉を置き、司祭の前に至り、首を屈め、オラリをとり、聖福音経を持って）

輔祭

君や、聖使徒及び福音者（某）の福音を宣ぶる者に祝福せよ、

司祭

（十字を描いて）、願くは神光栄にして讚美たる聖使徒及び福音者其の祈禱に依りて、爾なんじ福音を宣ぶる者に多くの力ある言を賜わん、其至愛の子我が主イイススハリストスの福音の行わるがためなり、

輔祭

「アミン」

（聖福音経の前に躬拝し、これを捧げて王門を出て、輔祭は升壇または指定せられた場所に立つ、司祭宝座の前に立ち、西に向かって）

司祭

（高声）睿智肅みて立て、聖福音経を聴くべし、
衆人に平安、

（詠）爾の神にも、

輔祭

（某）伝の聖福音経の読、

（詠）主や、光栄は爾なんじに帰す、光栄は爾なんじに帰す、

司祭

謹みて聴くべし、

輔祭

福音経を読む

司祭

爾福音を宣ぶる者に平安、

（詠）主や、光栄は爾なんじに帰す、光栄は爾なんじに帰す、

（輔祭王門を通して、聖福音経を司祭にわたす。王門閉じる。）

説教⁴¹

³⁹ 「どうか、わたしたちの主イエス・キリストの神、栄光の源である御父が、あなたがたに知恵と啓示との靈を与え、神を深く知ることができるようにし、心の目を開いてくださるよう。そして、神の招きによってどのような希望が与えられているか、聖なる者たちの受け継ぐものがどれほど豊かな栄光に輝いているか悟らせてくださるよう。（エペソ 1:17-18）」神は、わたしたちの心の内に輝いて、イイスス・ハリストスの顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました。」

⁴⁰ 「福音」とは「神のよき知らせ」の意。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの4つの福音書。私たちに神の子イイススのいのちとわざを与える。福音とは救世主、神の救いがこの世に来たことを言う。

「あなたがたは、語っている方を拒むことのないように気をつけなさい（ヘブル 12:25）。」「人の子よ、わたしがあなたに語るすべての言葉を心におさめ、耳に入れておきなさい（エゼキエル 3:10）。」「（ネヘミヤ 8:5-8）」イイススは人々に神の言葉に耳を傾けるようにに言った（参照マルコ 4:2-3,9）。「わたしの母、わたしの兄弟とは、神の言葉を聞いて行く人たちのことである（ルカ 8:21）」

⁴¹ （訳注）日本では説教は領聖前に行われることが多い。説教は福音の解き明かしとして本来この位置で行われた。

重連禱⁴²

- 輔祭 我等皆^{たましい} 霊を全うして曰はん、我等の思を全うして曰わん⁴³、 (詠) 主憐めよ
- 輔祭 主全能者、吾が列祖の神や、爾に禱る聆き納れて憐めよ⁴⁴、 (詠) 主憐めよ
- 輔祭 神や、爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ⁴⁵、 (詠) 主憐めよ 三次
- 輔祭 又我が国の天皇及び国を司る者のために禱る、
- 輔祭 又教会を司る至聖なる我等の主教(某)、及びハリストスに於ける^{ことごと} 悉くの我等の兄弟のために禱る、(司祭アンティミンスを半分開く)
- 輔祭 又我等の兄弟、諸司祭(諸修道司祭)、及びハリストスに於ける我等の衆兄弟のために禱る、
- 輔祭 又恒に記憶せらる、この聖堂の建立者、及び已に寝りし^{ことごと} 悉くの父祖兄弟、此の処と諸方とに葬られたる正教の者のために禱る⁴⁶、
- 輔祭 ⁴⁷又此の至尊なる聖堂に物を献り、善業を行い、之に勞し、之に歌い、及び此に立ちて^{なんじ} 爾の大にして豊かなる憐れみを仰ぎ望む者のために禱る⁴⁸、

熱禱の祝文

主我が神や、爾の諸僕より此の熱切の祈禱を受け、爾が憐れみの多きに因りて我等を憐れみ、爾の恵みを我等と凡そ爾の豊かなる憐れみを仰ぐ爾の民に遣し給え、

- 司祭 (高声) 蓋^{なんじ} 爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等^{なんじ} 光榮を 爾父と子と^{せいしん} 聖神に献ず、今も何時も世世に、 (詠) 「アミン」

死者の連禱

(主日には省略されることが多い)

- 輔祭 神や、爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ、

⁴² 「主憐れめよ」と祈るすべての信徒の熱切な祈り。

⁴³ 「霊で祈り、理性でも祈ることにしましょう(1コリント14:15)。」

⁴⁴ 「主の名を呼び求める者はだれでも救われる(ローマ10:13)。」

⁴⁵ 「主よ、我等を憐れみ、我等を憐れみ給え(聖詠122:3)」「わが神、主よ、ただ僕の祈りと願いを顧みて、僕が御前にささげる叫びと祈りを聞き届けてください(2歴代誌6:19)。」

⁴⁶ 私たちは主のうちに永眠した愛する人たちのために名を挙げて祈る。「聖人の死は主の前に貴し(聖詠経115:15)。「死も……わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです(ロマ14:8-9)。」神は永眠した聖人たちのことも、私たちのこともお忘れにならない。

⁴⁷ ここで特に祈りの必要な人たちの名を挙げて祈る。聖体礼儀が始まる前に司祭に祈って欲しい人の名前を提出する。他の必要な祈願もここで加えてもよい。(たとえば、宣教活動のため、迫害されているクリスチャンのため、洗礼の準備をしている人のためなど) 応答は「主憐れめよ」

⁴⁸ 献げもの：まもなくパンとぶどう酒の捧げものを行う。ここで神からいただいた豊かな賜を捧げる。集められたものは私たちの主への捧げものとなる。「各自、不承不承ではなく、強制されてでもなく、こうしようと心に決めたとおりにしなさい。喜んで与える人を神は愛してくださいからです(ローマ9:7)。「賛美、栄光、知恵、感謝、誉れ、力、威力が、世々限りなくわたしたちの神にありますように、アーメン(黙示7:12)。」

(詠) 主憐めよ 三次

輔祭 又寝りし神の諸僕 (某) の ^{たましい} 霊の安息のため、及び彼等に凡そ自由と自由ならざる罪の赦されんがために禱る、

(詠) 主憐めよ 三次

輔祭 主神が彼等の ^{たましい} 霊を諸義人の安息する所に入れ給わんことを禱る、

(詠) 主憐めよ 三次

輔祭 彼等に神の憐れみと天国と諸罪の赦とを賜わんことをハリストス我が死せざる王及び神に願う、

(詠) 主賜えよ

輔祭 主に禱らん、

(詠) 主憐めよ

司祭

諸の霊神と諸の肉体との神、死を亡ぼし悪魔を虚うし、爾の世界に生命を賜いし主や、爾 ^{みずか} 親ら寝りし爾の諸僕某の ^{たましい} 霊を、光る處、茂き草場、平安の處、病と悲と歎との遠ざかる處に安息せしめ、善にして人を愛する神なるに因りて、彼等が或は言、或は行、或は思にて犯し ^{ことごと} 悉くの罪を赦し給え、蓋人一も生きて罪を行はざる者なし、唯爾は罪なし、爾の義は永遠の義、爾の言は真実なり、

司祭 (高声) 蓋ハリストス我等の神や、爾は寝りし爾の諸僕某の復活と生命と安息なり、我等 ^{いのち} 光栄を爾と爾の無原の父と至聖至善にして生命を施す爾の ^{しん} 神とに献ず、今も何時も世に、

(詠) 「アミン」

啓蒙者の連禱

輔祭 啓蒙者や、主に禱るべし、

(詠) 主憐めよ

輔祭 信者や、啓蒙者のために禱らん、願くは主は彼等に憐みを垂れん、

輔祭 真実の言を以て彼等を啓蒙せん、

輔祭 義の福音経を彼等に啓かん、(司祭アンティミンスをすべてひらく)

輔祭 彼等を其聖・公・使徒の教会に一にせん、

輔祭 神や、爾の恩寵を以て、彼等を救い ^{たす} 憐み ^{まも} 佑け護れよ、

輔祭 啓蒙者や、爾等の首を主に屈めよ、

(詠) 主 ^{なんじ} 爾に

司祭

啓蒙者のために黙誦する祝文-----

主我が神、高きに居り卑きを臨み、爾の独生子・神・我が主イイスス・ハリストスを遣して人間の救いとなしし者や、爾の僕・啓蒙者その首を爾に屈めし者を顧み、時に随いて、彼等に復生の浴盤、諸罪の赦し、不朽の衣を賜い、彼等を爾が聖・公・使徒の教会に一にし、彼等を爾の選ばれたる群れに合せ給え、

司祭 (高声) 願くは彼等も我等と ^{とも} 偕に、爾父と子と聖樹の至尊至栄の名を讃揚せん、今も何時も世に、(司祭アンティミンスの海綿を取り十字を描き、右上部へ置く。)

(詠) 「アミン」

啓蒙者出よ⁴⁹

輔祭 1 衆啓蒙者出でよ、

輔祭 2 啓蒙者出でよ、

輔祭 1 衆啓蒙者出でよ、

輔祭 啓蒙者一人もなく、唯信者復又安和にして主に祷らん⁵⁰、

(詠) 主憐めよ

司祭 衆啓蒙者出でよ、啓蒙者出でよ、衆啓蒙者出でよ、啓蒙者一人もなく、唯信者復又安和にして

主に祷らん、

(詠) 主憐めよ

司祭 アンティミンスを開いた後誦する第一の信者の祝文⁵¹-----

主、万軍の神や、爾が我等に、今も爾の聖なる祭壇の前に立ち、爾の慈憐に俯伏し、我等の罪と衆人の過ちとのために祈禱するを赦し給いしを爾に感謝す、神や、我等の禱りを納れ、我等を爾が衆人のために、爾に祈りと願いと無血の祭とを献ずるに勝る者となし給へ、我等爾が聖神の力にて此の爾の奉事のために立てし者を、定罪なく、躓なく、その良心の潔き證を以て、何の時何の処にも爾をよぶに適う者となして、爾我等に聴き、爾が哀憐の多きに依りて、我等のために仁慈の者となるを致せ、

輔祭 神や、爾の恩寵を以て、我等を^{たす}助け救い^{まも}憐み護れよ、

(詠) 主憐めよ

輔祭 睿智、

司祭 (高声) 蓋凡そ光荣尊貴伏拝は爾父と子と^{せいしん}聖神に帰す、今も何時も世世に、

(詠) 「アミン」

信者の連禱

輔祭 我等復又安和にして主に祷らん、

(詠) 主憐めよ

……………司祭一人奉事するとき、以下の四禱詞を誦せず、……………

輔祭 上より降る安和と我等が^{たましい}霊の救のために主に祷らん、

輔祭 全世界の安和、神の聖なる諸教会の堅立、及び衆人の合一のために主に祷らん、

輔祭 此の聖堂、及び信と慎しみと神を畏る心とを以て此に来る者のために主に祷らん、

輔祭 我等諸の^{うれい}憂愁と^{いかり}忿怒と^{あやうき}危難とを免るがために主に祷らん、

⁴⁹ ここで「ことばの礼儀」が終了する。初代教会ではご聖体を受けられない啓蒙者は退席するように言われた。領聖する人だけが聖体礼儀の後半に参加することができた。そのことから聖体礼儀への参加とは「領聖すること」を含むことがわかる。

⁵⁰ 聖体礼儀の後半は「信者（領聖するキリスト者）の礼儀」である。主イイスス・ハリストスの聖体聖血を領けることに焦点がおかれる。

⁵¹ イイススが「立って祈るとき（マルコ 11:25）」と言われたように感謝の祈りを捧げるのにふさわしい姿勢は立つ姿勢と信じる。

司祭

信者の祝文第二

善にして人を愛する主や、我等復且数々爾に俯伏し、爾に禱る、我等の禱を顧みて、我等の^{たましい}霊と体とを凡そ肉体と霊神との穢れより潔くし、我等に、^{きず}玷なく、定罪なく、爾の聖なる祭壇の前に立つを賜へ、神や、我等と偕に祈禱する者にも、^{いのち}生命と信と属神の智識との進歩を与え給え、彼等が常に畏れと愛とを以て爾に努めて、きずなく、定罪なく、爾の聖機密を領け、爾の天国に入るに勝る者となるを得せしめ給へ、

輔祭

神や、爾の恩寵を以て、我等を^{たす}助け救い^{まも}憐み護れよ、

(詠) 主憐めよ

輔祭

睿智、(輔祭北門より高壇=至聖所に入る)

司祭

(高声) 我等常に爾が^{けんべい}権柄の下に^{まも}護られて、^{せいしん}光栄を爾父と子と聖神に献ずるがためなり、今も何時も世世に、

(詠) 「アミン」

大聖入「ヘルビムの歌」

52

(詠) 我等^{おうみつ}奥密にしてヘルビムを^{かたど}像り、^{いのち}聖三の歌⁵³を生命を施す三者に歌いて、今この世の^{おもんばか}慮^{ことごと}を悉く退くべし、(旧訳：我等謹んでヘルビムにのっとり、聖三の歌を生命を施すの三者に奉りて、凡そこの世のつとめを退くべし)

ヘルビムの歌を歌う時司祭黙誦する所の祝文⁵⁴

肉体の慾と快樂とに縛られし者は、一も爾光栄の王に來り、或は近づき、或は奉事するに堪うるなし、蓋爾に奉事するは、天軍のためにも大にして畏るべきなり、然れども爾は言い難く量り難き爾の仁愛に因りて、本性を易へず失はずして人となり、我等のために司祭首となり、又萬有の主宰なるに縁りて、我等に此の奉事の無血祭の聖事を伝え給えり、蓋主我が神や、爾は独り天地の事を宰理す、爾はヘルビムの宝座に荷わる者、セラフィムの主、イズライリの王、独り聖にして聖者の中に息う者なり、故に我爾独り善にして善く納る者に禱る、我罪ありて堪へざる爾の僕を顧み、我が霊と心とを邪なる思慮より浄め、我神品の恩寵を被れる者を、爾が聖神の力に藉りて、此の爾の聖なる食案の前に立ち、爾が至浄なる聖体至尊なる聖血の機密を行うに堪うる者となし給へ、蓋我首を屈めて爾に就き、爾に禱る、爾の顔を我より避くる勿れ、我を爾が僕衆の中より却くる勿れ、乃ち我罪有りて当らざる爾の僕に此の祭物を献ぐるを致させ給へ、蓋ハリストス我が神や、爾は献ずる者と献ぜらる者、受くる者と頌たる者なり、我等光栄を爾と爾の無原の父と至聖至善にして生命を施す爾の神とに献ず、今も何時も世世に、

我等奥密にしてヘルビムを像り、聖三の歌を生命を施す三者に歌ひて、今此の世の慮りを悉く退く可し、神使の軍の見えずして荷ひ奉る萬有の王を戴かんとするに縁る、ア ril l i y a、ア ril l i y a、ア ril l i y a (躬拜)

52 大聖入。ここで信者は主への感謝の献げものの準備をする。信徒の手で焼いたパンとぶどう酒が捧げられる。パンとぶどう酒は奉献台から運ばれ宝座の上に置かれる。初代教会では、大地に豊かに穀物をあまねく散らした神、今ひとつのパンとしてその穀物を集められた神に、神の民をハリストスの体として集めてくださるよう祈った。「パンは一つだから、わたしたちは大勢でも一つの体です。皆が一つのパンを分けて食べるからです (1 コリント 10:17)。」

「ヘルビムの歌」。天使ヘルビムが神の王座の前で神に仕え (エゼキエル 10)、神の宮において神の働きの機密のうちに働く。だから我等も宝座に近づく今、パンとぶどう酒を神に捧げ、天使の役目をはたす。(参照、出エジプト 25:22、聖詠 17:10、99:1、イザヤ 37:15-16)

53 機密としての天の宝座で神が臨在へと入り「聖、聖、聖なる哉」と歌う備えをする。

54 司祭はパンとぶどう酒の献げものを宝座に運ぶ。「私たちの感謝の献げものを受け入れてください」と神に願うのは、私たちが天の宝座に受け入れてくださいと願うことである。

(この際王門を開く。輔祭香炉をとって、宝座の四方、至聖所内と司祭の前に炉儀。その時第五十聖詠と傷感の諸讃詞を、司祭とともに黙誦。

最後に、輔祭続いて司祭、共に奉献台の前に立つ、司祭炉儀を聖品に行って、黙禱。)

司祭 神や、我罪人を浄め給へ、3次

輔祭 (司祭に向って) 君や、取れよ、

司祭 (太気を取り、輔祭の左肩に置いて) 爾の手を挙げ、聖所に向いて主を崇め讃めよ、(ディスコスを取り輔祭の頭上に置く。堂役が先導。堂を環って王門前で)

輔祭 願くは主、神はその国に於て、我国の天皇及び国を司る者を恒に記憶せん、今も何時も世世に、

司祭 願くは主、神はその国に於て、教会を司る尊貴なる我等の(府)主教()を常に記憶せん
今も何時も世世に、

司祭 願くは主、神はその国に於て、已に寝りし府主教(某)、云々を恒に記憶せん、今も何時も世世に、

司祭 願くは主、神はその国に於て、爾衆正教の「ハリストティアニン」等を恒に記憶せん、今も何時も世世に、

(詠)「アミン」⁵⁵

神使の軍の見え^{にな}ずして荷^{ばんゆう}い奉^{いただ}る萬有の王を戴^よかんとするに縁る。

(または：神の並みいる使いは見え^{にな}ずしてにない奉^よる万物の司をおおい戴^よけばなり。)

「ア ril イヤ」「ア ril イヤ」「ア ril イヤ」

輔祭 願くは主、神は其国に於て、爾司祭品を恒に記憶せん、

司祭 願くは主、神は其国に於て、爾輔祭品を恒に記憶せん、今も何時も世世に、

司祭 (聖ポティールを宝座に置き、又輔祭の頭上から聖ディスコスを取り、宝座に置いて)

尊きイオシフは爾潔き身を木より下し、浄き布につつみ、香料にておおい、新なる墓におさめり、

ハリストスや、爾は神なるにより、体にて墓にあり、^{たましい}霊にて地獄に在り、右盜と^{とも}偕に天堂に在り、父と聖神と共に宝座に在り、限りなき者として一切を満て給へり、ハリストスや、我が復活の泉たる爾の墓は、^{いのち}生命を施す者、地堂より^{あらか}美しき者、実に如何なる王の宮よりも輝ける者と^{あらわ}顕れたり、

(聖ディスコス及び聖ポティールの小袱を取って宝座の一方に置き、太気を輔祭の肩より取って之を熏じ、聖物を覆う)

尊きイオシフは爾の潔き身を木より下し、浄き布につつみ、香料にて覆い、新なる墓におさめり。(香炉を

輔祭の手より取り、聖物に3度炉儀) 主や、爾の恵に因りて恩をシオンに垂れ、イエルサリムの城垣を建て給へ、

その時に爾義の祭、^{ささげもの}献物と^{やきまつり}燔祭を喜びうけん、その時に人々爾の祭壇に^{こうし}犢をそなえんとす、(香炉を返し、フェロンを下げ、首を屈め、輔祭に向って)、兄弟及び同役者や、我を記憶せよ、

輔祭 願くは主・神は其国に於て、爾司祭品を恒に記憶せん、

(輔祭もまた首を屈め、右手の三指でオラリをとり、司祭に向って) 聖なる君や、我のために禱れよ、

司祭 ^{せいしん}聖神爾に臨まんとす、至上者の^{ちから}能 爾を庇わんとす、

輔祭 ^{せいしん}此の聖神は我が生涯我等の奉事を助けん、聖なる君や、我を記憶せよ、

⁵⁵祈りを聞き届け、聖体礼儀のうちにもおられるようにハリストスに祈る。「イズライリの牧者よ、耳を傾けよ、イオシフを羊の如く導く者、ヘルワィムに坐する者よ、己を顕わせ(聖詠 79:1)。」

献げものは宝座に置かれた。「憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜にかなった助けをいただくために、大胆に恵みの座に近づこうではありませんか(へブル 4:16)。」

司祭 願くは主・神は其国に於て、爾を恒に記憶せん、今も何時も世世に、
輔祭 「アミン」(司祭の右手に接吻し、北門を出て、王門前で連禱。)

増連禱⁵⁶

輔祭 我等主の前に吾が禱を増し加えん、

(詠) 主憐めよ

輔祭 献げたる尊き祭品のために主に禱らん、

輔祭 此の聖堂、及び信と慎しみと神を畏る心とを以て此に来る者のために主に禱らん⁵⁷、

輔祭 我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るがために主に禱らん、

輔祭 神や、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

輔祭 此の日の純全・成聖・平安・無罪ならんことを主に求む⁵⁸、

(詠) 主賜えよ

輔祭 平安の神使、正しき教導師、吾が霊体の守護者を賜わんことを主に求む⁵⁹

輔祭 我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、

輔祭 我等の 霊 に善にして益ある事及び世界に平安を賜わんことを主に求む⁶⁰、

輔祭 我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む⁶¹、

輔祭 我等の生命の終が「ハリストティアニン」に適い、疾なく、耻なく、平安なること、及びハリストスの畏る可き審判に於て宜しき對をなすを賜わんことを求む⁶²、

輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光荣の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に 悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、

(詠) 主爾に、

司祭 **聖祭品を宝座に安置する後の奉献祝文**-----

主・神・全能者、独り聖にして心を盡くして爾をよぶ者より讚美の祭を受くる者や、我等罪人の禱りをも受けて爾の聖なる祭壇に携え、我等を、我が罪と衆人の過ちとのために、爾に献物と属神の祭とを献ずるにたうる者となし給へ、我等に爾の前に恩寵を得せしめて、我等の祭は爾に善く納れらる者となり、爾が恩寵の善神は臨みて、我等の中と此の供へられたる祭品と爾の衆人とに居るを致させ給へ⁶³、

司祭 (高声) 爾の独生子の慈憐に因りてなり、爾は彼と至聖至善にして生命を施す爾の神と 僭に崇め讃めらる、今も何時も世世に、

(詠) 「アミン」

56 「我を顧み、我を憐れみ、爾の力を爾の僕に賜い、爾の婢の子を救い給え (聖詠 86:16)」

57 「主の使いは主を畏るる者を環り衛りて、彼等を援く (聖詠 34:7)」

58 「天使たちは皆、奉仕する霊であつて、救いを受け継ぐことになっている人々に仕えるために、遣わされたのではなかったですか (ヘブル 1:14)。」守護天使に関することは聖詠 90:11 とマタイ 18:10 参照

59 「恵み深い主よ、彼らをお赦しください。……神、先祖の神、主を求めようと決意しているのです(2歴代誌 30:18-19)」

60 「二つのことをあなたに願います。……貧しくもせず、金持ちにもせず／わたしのために定められたパンで／わたしを養ってください (箴言 30:7-9)。」

61 「なぜなら、わたしたちは皆、キリストの裁きの座の前に立ち、善であれ悪であれ、めいめい体を住みかとしていたときに行ったことに応じて、報いを受けねばならないからです (2 コリント 5:10)。」

62 「蓋来たりて地を審判せん、彼は義を以て世界を審判し、真実を以て諸民を審判せん (聖詠 95:13)。」

63 「ハレルヤ。救いと栄光と力とは、わたしたちの神のもの (黙示 19:1)。」

(詠) 汝の神にも輔

司祭 衆人に平安⁶⁴、
我等互に相愛すべし、同心にして承け認めんがためなり⁶⁵、

(詠) 父と子と聖神^{せいしん}一体にして分れざる聖三者を、

司祭

(躬拝三次) 主我の力や、我爾を愛せん、主は我の防固、我の避所なり、3次
(覆われた聖物、先ず聖ディスコスの上、次ぎに聖ポティールの上、及び宝座の端に接吻。複数の司祭が奉事する時は全員聖物に接吻して、互に肩に接吻しあう。首位司祭から「ハリストスは我等の間に在り」66接吻を受けた者は「誠に在り、復永く在らんとす」67と答える。

輔祭 門、門。敬みて聴くべし⁶⁸、

信 経⁶⁹ (司祭太気をとって聖祭物の上にかかげる。司祭複数のときは共に太気をとって聖祭物上で上下させる、信経を黙誦)

(詠) 我信ず、一の神、父^{かみ}全能者、天と地、見ゆると見えざる万物を造りし主を。

又信ず、一の主イイスス・ハリストス、神の独生の子、万世^{よろずよ}の前に父より生れ、光よりの光、真^{まこと}の神よりの真^{まこと}の神、生れし者にて造られしに非ず、

父と一体にして万物彼に造られ、我等人人のため、又我等の救いのために天より降り、聖神^{せいしん}及び童貞女マリヤより身を取り人となり、

我等のために、ポンティ・ピラトの時 十字架^{くぎ}に釘うたれ、苦しみを受け葬^{ほう}むられ、

第三日に聖書にかないて復活し、天に^{のほ}升起、父の右に^さ坐し、光栄^{あらわ}を顕して生ける者と死せし者とを^{しんぱん}審判するためにまた来り、その国終りなからんを。

64 「また、キリストの平和があなたがたの心を支配するようにしなさい (コロサイ 3:15)。」「平和の源である神があなたがた一同と共におられるように(ローマ 15:33)」

65 「わたしたちの主イエス・キリストの名によってあなたがたに勧告します。皆、勝手なことを言わず、仲たがいせず、心をつにし思いをつにして、固く結び合いなさい (1 コリント 1:10)。」「心を合わせ声をそろえて、わたしたちの主イエス・キリストの神であり、父である方をたたえさせてくださいますように (ローマ 15:6)。」

66 「イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた (ルカ 24:36)。」「長老たちの間に、屠られたような小羊が立っているのを見た (黙示 5:6)。」

67 「神が確かにあなたがたの中におられる (1 コリント 14:21)。」

68 「門、門」初代教会では聖変化と領聖の間中、門番は入会していない人を退出させた。

69 信経は正教会が採択したキリスト教会の基本的な信仰である。現在の形は 381 年に正式に採択された。信経を信仰告白することは神への信仰に基づいて互いに心と霊が一致することである。聖書に基づいたたくさんの宣言がふくまれる。「口でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。実に、人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われるのです (ローマ 10:9-10)。」

「聖なる者たちに一度伝えられた信仰のために戦うことを、勧めなければならないと思ったからです (ユダ 1:3)。」
「あなたがたは、真理を受け入れて、魂を清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになったのですから、清い心で深く愛し合いなさい (2 ペトロ 1:22)。」

「しかし、愛する人たち、あなたがたは最も聖なる信仰をよりどころとして生活しなさい (ユダ 1:20)。」

又信ず、^{せいしん}聖神・^{いのち}主・^{いのち}生命を施す者、父より出で、父及び子と共に拝ま
 れ讃められ、^ほ預言者を以てかつて言いしを。
 又信ず、一の^{おおやけ}聖なる公なる使徒の教会を。
 我認む、一の^{もつ}洗礼 以て^{ゆる}罪の赦しを得るを。
 我望む、死者の復活、並びに^{らいせ}来世の^{いのち}生命を、「アミン」。

安和の憐み (アナフォラ) ⁷⁰

輔祭 正しく立ち、畏れて立ち、敬みて安和にして聖なる献物を奉らん⁷¹、

(詠) 安和(平和)の憐み、讃揚の祭を⁷²、(または親しみの^{さき}捧げもの、^ほ讃め揚げの祭を⁷³)

(司祭太気を聖物より取って、接吻して宝座の一方に置く、輔祭躬拝して至聖所に入り、リピダ(聖扇)をとって、聖祭品を扇ぐ)

司祭 (高声)願くは我が主イエス・ハリストスの⁷⁴恩⁷⁵、神・父の慈、^{せいしん}聖神の^{したしみ}親は、爾衆人と^{とも}偕に
 在らんことを、

(詠) ^{なんじ}爾の^{しん}神とも⁷⁶、

司祭 心上に向うべし⁷⁷、

(詠) 主に向えり、

司祭 主に感謝すべし⁷⁸、

(詠) 父と子と^{せいしん}聖神、一体にして分れざる三者に伏し拝むは当然にして義なり

(または父と子と^{せいしん}聖神、一体にして分れざる三者に伏し拝むはまことに当たれり)、

司祭

爾を歌頌し、爾を讃揚し、爾を讃美し、爾に感謝し、爾が一切治むるところに於て爾に伏し拝むは当然にして
 義なり、蓋爾と爾の独生子と爾の聖神は、言い難く、知り難く、見るべからず、測るべからず、永く在り、恒
 に変らざる神なり、爾は我等を無より有となし、陥りし者を復起し、及び我等を天に昇らしめて、爾が来世
 の国を賜うに至るまで万事を行いて止めず、これ等のために、凡そ我等が知る所、知らざる所、顕れし所、顕
 れざりし所の我等に賜わりし諸恩のために、我等爾と爾の独生子と爾の聖神とに感謝す、又この奉事のために

⁷⁰ アナフォラの原義は「持ち上げる」。今、心とたましいを生ける神の玉座の前に上げる。

⁷¹ 「わたしたちが神を賛美する賛美の杯は、キリストの血にあずかることではないか (1 コリント 10:16)。」

⁷² 「奉献」とは何かを捧げること。私たちの心とともにパンとぶどう酒が聖なる贈り物として捧げられる。

⁷³ 祈禱書(奉事経)と使われている聖歌譜によって訳文が異なる。

⁷⁴ 「イエスを通して賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえる唇の実を、絶えず神に献げましょう (ヘブル 13:15)」

⁷⁵ 「わたしたちの主イエス・キリストの恵み(2 コリント 8:9)『恩寵(めぐみ)』とは私たちが受けるに値しない、自分で勝ち得たものでもない神の愛と好意。

⁷⁶ (訳注) 日本では通常「爾の神にも」と歌われているが、ギリシア語スラブ語原文とも、ここと「万民をも」の後は「爾の神とともに」で他の「爾の神にも」と異なる。

⁷⁷ 「天にいます神に向かって両手を上げ心も挙げて言おう (哀歌 3:41)」

⁷⁸ 「主を讃栄せよ、蓋彼は仁慈にして(聖詠 106:1) 恵み深い主に感謝せよ(詩編 107:1)」
 感謝の捧げものに関する記述は聖詠のあちこちに見られる。(聖詠 49:23、115:17 参照)

爾に感謝す、爾之を我等の手より領くるを甘んじ給えり、然れども千々の神使首及び万々の神使ヘルビム及びセラフィム、六翼の者、多目の者、高く翔る者、翼を具うる者は爾の前に立ちて⁷⁹

司祭 (高声) ^{かちうた}凱歌を歌い、よび、叫びて曰う、

(詠) 聖聖聖なる哉主「サワオフ」、^{なんじ}爾の光榮は天他に満つ、至と高きに「オサンナ」、主の名に因りて来る者は崇め讃めらる、至と高きに「オサンナ」、^ほ⁸⁰ (輔祭は星架を取って聖ディスコスの上に十字を描き接吻して置く。宝座の右に立ちリビダをとって聖祭品の上を扇ぎ蠅の飛集するのを防ぐ、リビダがなければ小楯で代用、)

司祭

人を愛する主宰や、我等も此の福たる軍と^{とも}偕に^よびて曰う、聖なる哉、至聖なる哉、爾と爾の独生子と爾の聖神、聖なる哉、至聖なる哉、爾の光榮は威厳なり、爾は爾の世界を愛して、爾の独生子を賜うに至り、凡そ之を信ずる者に沈淪を免れて永生を得せしむ、彼来りて、凡そ我等に於ける定制を成全し、付されし夜、正しく言へば^{みづか}親ら己を世界の^{いのち}生命のために付し夜、其聖にして至浄無^{てん}なる手にパンを取り、感謝し、祝讃し、成聖し、^さ撃きて其聖なる門徒及び使徒に予へて曰へり⁸¹、

司祭 (高声) 取りて食え、是我が体、爾等のために^さ撃かる者、罪の赦しを得るを致す⁸²、

(詠) 「アミン」

(この時、輔祭右手の三指でオラリをとり、司祭に聖ディスコスを示す、同く司祭皆之を飲めと誦する時、輔祭聖ポティールを指す、)

司祭

同く晚餐の後に爵を執りて

(高声) 皆之を飲め、是我が新約の血、爾等及び衆くの人のために流さる者、罪の赦しを得るを致す⁸³、

(詠) 「アミン」

司祭

故に我等此の救を施す誠め、及び凡そ我等のために有りし事、すなわち十字架、墓、第三日の復活、天に昇る事、右に坐する事、光榮なる再度の降臨を記憶して⁸⁴

⁷⁹ 司祭の祈り (ローマ 4:17 と 1 ティモテ 1:17 参照)

今集まった各人が心と霊を一つにして万物の主^に感謝を捧げる時。

「今おられ、かつておられた方、全能者である神、主よ、感謝いたします。大いなる力を振るって統治されたからです (黙示録 11:17)」「屠られた小羊は、力、富、知恵、威力、誉れ、栄光、そして賛美を受けるにふさわしい方です (黙示録 5:12)」「立って、あなたたちの神、主を賛美せよ…(ネヘミヤ 9:5-6)」

「我讚美を以て爾に償わん、蓋爾は我が霊を死より、我が目を涙より、我が足を躓きより救い給えり、我が神の顔の前、生ける者の光の内に行かん為なり (聖詠 55:12-13) 感謝の献げ物をささげます。あなたは死からわたしの魂を救い突き落とされようとしたわたしの足を救い命の光の中に神の御前を歩かせてくださいます (詩編 56:13-14)」

⁸⁰ 「聖なるわたしの名を汚さぬよう、イスラエルの人々がわたしに奉納する聖なる献げ物に細心の注意を払いなさい。わたしは主である (レビ 22:1)」

「わたしは、高く天にある御座に主が座しておられるのを見た。衣の裾は神殿いっぱい^に広がっていた。上の方にはセラフィムがいて、それぞれ六つの翼を持ち、二つをもって顔を覆い、二つをもって足を覆い、二つをもって飛び交っていた。彼らは互いに呼び交わし、唱えた。「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地をすべて覆う (イザヤ 6:1-3)」「主の名によって来られる方に、祝福があるように。いと高きところにホサナ (マタイ 21:9)」

⁸¹ 今聖体礼儀は信徒の交わりと聖祭品の成聖の働きのうちにハリストスが^におられることを明確に顕す。

聖使徒パウロが 1 コリント 11:23-24 で述べた同じ聖体機密の儀式が続く。この部分は正教会の変わらぬ伝統である。

⁸² (マタイ 26:26、ルカ 22:19)

⁸³ (マタイ 26:27-28、マルコ 14:24)

⁸⁴ 正教会では「記憶」とは過去にあったことを呼びおこすだけではない。「記憶」とは今ここで行われているできごと、

司祭 (高声) 爾の賜を、爾の諸僕より、衆のため一切のために爾に献りて⁸⁵、
(輔祭リピダを置き、手を十字形にし聖ディスクス及び聖ポティールをとって捧げ拜する)

(詠) 主や、^{なんじ}爾を崇め歌い、^{なんじ}爾を讚め揚げ、^{なんじ}爾に感謝し、我が神や、^{なんじ}爾に
禱る、⁸⁶

司祭 我等復爾にこの靈智なる無血の奉事を献じて、願い祈り切に求む、爾の聖神を我等及びこのそなえたる
祭品に遣し給へ⁸⁷、

輔祭 (リピダを置き司祭の側に立ち、二人宝座の前に立って三次躬拝し、黙禱して、)第三時に爾の至聖神を爾の使徒に遣わ
しし至善の主や、之を我等より取り上ぐることなかれ、なお我等爾に祈る者のうちに之を新たにせよ、

(句) 神や、潔き心を我に造り、正しき靈を私の衷に改め給へ、

第三時に爾の至聖神を爾の使徒に遣わしし至善の主や、之を我等より取り上ぐることなかれ、なお我等爾に祈
る者のうちに之を新たにせよ、

(句) 我を爾の顔より逐うこと勿れ、爾の聖神を我より取り上ぐること勿れ、

第三時に爾の至聖神を爾の使徒に遣はし至善の主や、之を我等より取り上ぐることなかれ、なお我等爾に祈
る者のうちに之を新たにせよ、(輔祭首をかがめてオラリをとり、聖パンを指し、低声で)

輔祭 (司祭に向かって) 君や、聖餅^{パン}に祝福せよ、

司祭 (十字を聖パンの上に画して)、この餅^{パン}を將て、爾のハリストスの尊体と成し⁸⁸、

輔祭 「アミン⁸⁹」君や、聖爵に祝福せよ、

司祭 (十字を画して) 此の爵中のものをもって、爾のハリストスの尊血と成し、

輔祭 「アミン」(ポティールとディスクスを指して、)君や、二の物に祝福せよ、

司祭 (十字を画して) 爾の聖神を以て之を変化せよ、

輔祭 「アミン」「アミン」「アミン」

輔祭 (首を司祭の前に屈めて) 聖なる君や、我を記憶せよ、

司祭 主・神は其国に於て、恒に爾を記憶せん、今も何時も世世に、

輔祭 「アミン」(元の場所に戻りリピダをとって聖祭品を前のように扇ぐ)

常に福

司祭

願くは此は領くる者のために、^{たましい}靈の警醒となり、諸罪の赦しとなり、爾が聖神の体合となり、天国を得ること
となり、爾に於ける勇敢となり、審察或は定罪とならざらんことを、
又この靈智なる奉事を、信を以て寝りし元祖・列祖・太祖・預言者・使徒・伝道者・福音者・致命者・表信者・

そこに参加することを言う。

⁸⁵ 「我何を以て主の我に施しし悉くの恩に報いん、我救いの爵を受けて、主の名を呼ばん(聖詠 115:12-13)。主はわ
たしに報いてくださった。わたしはどのように答えようか。救いの杯を上げて主の御名を呼び(詩編 116:12-13)

⁸⁶ 「すべてはあなたからいただいたもの、わたしたちは御手から受け取って、差し出したにすぎません(1 歴代誌 29:14)」

⁸⁷ 「わたしたちが神を賛美する賛美の杯は、キリストの血にあずかることではないか。わたしたちが裂くパンは、キリ
ストの体にあずかることではないか(1 コリント 10:16)」

⁸⁸ 神にその聖神をパンとぶどう酒に遣わしてハリストスの体と血にしてください、聖神を私たちに遣わしてハリストス
の体としてくださいと願ひ呼ぶ。

⁸⁹ 「アミン」とは「そうなりますように」の意であるから、全員が「アミン」と参加する。聖体機密において私たちと
ともにハリストスが臨在することを私たち全員が願うという合意を持たねばならない。

「衆民云うべし、アミン(聖詠 105:48)

節制者、及び凡そ信を以て終りし義なる 靈^{たましい} のために爾に献ず⁹⁰、
(輔祭は炉儀を宝座の四方に行い、生死者を記憶する⁹¹)

司祭 (高声) 特に至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光荣の女宰・生神女^{しょうしんじょ}・永貞童女マリヤのため⁹²、
(詠) 常に 福^{さいわい} にして全く玷^{きず}なき生神女^{しょうしんじょ}、我が神の母なる 爾^{なんじ}を讚美するは (さ
いわいなりと唱うるは) 真^{まこと}にあたれり⁹³、

ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え、貞操^{やぶ}を壊らずして神^{かみ}・
言^{ことば}を生みし実^{じつ}の生神女^{しょうしんじょ}たる 爾^{なんじ}を崇^{たか}め讃^ほむ、⁹⁴

司祭 (輔祭 死者の名を記憶) -----
聖預言者・前駆・授洗イオアン、光荣にして讚美たる聖使徒、当日記憶を為す所の聖某、及び爾が諸聖人のた
めに献ず、神や、彼等の祈祷に因りて我等を顧み、ならびに凡そ永生の復活の望を懐きて寝りし者を記憶して、
彼等を爾が顔の光の照らす所に安息せしめ給へ、
また爾に禱る、主や、爾が真実の言を正しく伝うる正教者の凡その主教品、凡その司祭品、ハリストスに因る
輔祭品、及び 悉^{ことごと}くの神品を記憶せよ、
又この靈智なる奉事を、全世界のため、聖・公・使徒の教会のため、潔淨にして尊く 生^{いのち}を度^{わた}る者のため、我が
国の天皇及び国を司る者のために爾に献ず、主や、彼等に泰平の国政を賜へ、我等も彼等の平和により、凡そ
の敬虔と潔淨とを以て、恬静安然にして 生^{いのち}を度^{わた}らんがためなり、

司祭 (高声) 主や、殊に教会を司る主教を記憶し、彼等を平安・無難・尊貴・壮健・長寿なる
者、及び爾が真実の言を正しく伝うる者として、爾の聖なる教会に与え給え、

(詠) 万民をも⁹⁵、

司祭 (輔祭 生者の名を記憶) -----
主や、我等が居る所の此の都邑^{まち}と凡の都邑^{まち}と他方、及び信を以て此の中に居る者を記憶せよ、主や、航海する
者、旅行する者、病を患うる者、艱難^{とりこ}に遭う者、虜^{とりこ}となりし者、及び彼等の救を記憶せよ、主や、爾の諸聖
堂に物を献り、善業を行う者、及び貧者を記念する者を記憶し、及び我等衆人に爾の憐を垂れ給へ⁹⁶、

司祭 (高声) 並に我等に、口を一にし心を一にして⁹⁷、爾父と子と 聖神^{せいしん}の至尊至厳の名を讚栄讚頌す

90 「神の言葉と自分たちがたてた証しのために殺された人々の魂を、わたしは祭壇の下に見た (黙示 6:9)」

91 「すべての聖なる者たちの祈りに添えて、玉座の前にある金の祭壇に献げるためである。香の煙は、天使の手から、
聖なる者たちの祈りと共に神の御前へ立ち上った (黙示 8:3-4)

「願わくは我が禱は香炉の香りの如く爾が顔の前に登り(聖詠 140:2)

92 私たちがハリストスの最後の晩餐を記憶し我々とともにあることを呼び願ったのだから、私たちは神の国のすべての
メンバー(聖人)を呼ぶ。聖人との交わりの一部として、特別に生神女マリアを記憶する。

93 まことに当たれり:「あなたは、適格者と認められて神の前に立つ者、恥じるところのない働き手、真理の言葉を正しく
伝える者となるように努めなさい (2テモテ 2:15)」。

94 復活祭期はパスハのイルモス第9歌頌「神の使い」を歌う。

95 すべての聖人を記憶するほかに、世界のすべての人々のために祈る。

96 「わたしたちが貧しい人たちのことを忘れないように (ガラテア 2:10)」

97 「心を合わせ声をそろえて、わたしたちの主イエス・キリストの神であり、父である方をたたえさせてくださいます
ように (ローマ 15:6)」

るを賜え⁹⁸、今も何時も世世に、

(詠)「アミン」

司祭 (司祭衆人に向い、祝福して) 願くは大なる神、我が救主イイス・ハリストスの憐みは、爾衆人と^禱に在らんことを⁹⁹、

(詠) 爾の神とも、

増連禱¹⁰⁰

(輔祭は司祭の祝福を受けて至聖所を出て、王門前に立って、)

輔祭 我等諸聖人を記憶して、復又安和にして主に禱らん、 (詠) 主憐めよ

輔祭 已に献ぜられ及び聖にせられし尊き祭品のために主に禱らん¹⁰¹、

輔祭 人を愛する我が神が、之を其聖なる天上の無形の祭壇に置き、属神の馨香にて享け、我等に報いて、神妙の恩寵と聖神の賜とを降すがために禱らん¹⁰²、

司祭

人を愛する主宰や、我等は我が^{ことごと} 悉^{いのち}く^{いのち}の生命と望とを爾に委ねて、願ひ祈り切に求む、我等に、淨き良心を以て、爾が天上の畏るべき機密、この聖せられたる属神の筵にあずかるを賜いて、これが罪の赦し、過ちのなだめ、聖神の体合、天国の嗣業、爾における勇敢となりて、審案あるいは定罪とならざるを致させ給へ、

輔祭 我等諸の^{うれい}憂愁と^{あやうき}憤怒と^{あやうき}危難とて免るがために主に禱らん、

輔祭 神や、爾の恩寵を以て、我等を^{たす}佑け^{たま}救い^{まも}憐み^{まも}護れよ、

輔祭 此の日の純全・成聖・平安・無罪ならんことを主に求む、 (詠) 主賜えよ

輔祭 平安の神使、正しき教導師、吾が霊体の守護者を賜わんことを主に求む

輔祭 我等の罪と過とを^{なだ}宥め^{なだ}赦さんことを主に求む、

輔祭 我等の^{たましい}霊に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、

輔祭 我等の^{いのち}生命の余日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、

輔祭 我等の^{いのち}生命の終りが「ハリストティアニン」に適い、疾なく、耻なく、平安なること、及びハリストスの畏るべき審判に於て宜しき^{こたえ}對をなすを賜わんことを求む、

輔祭 信の同一と^{せいしん}聖神の体合とを決めて、我等己の身及び互に各の身を以て、ならびに^{ことごと}悉くの我等の^{いのち}生命を以て、ハリストス神に委託せん、 (詠) 主爾に

98 「我が神、我が王よ、我爾を尊とみ、爾の名を世々に崇め讃めん (聖詠 145:1)」

99 「信じた人々の群れは心も思いも一つにし (使徒 4:32)」 「祝福に満ちた希望、すなわち偉大なる神であり、わたしたちの救い主であるイエス・キリストの栄光の現れを待ち望むように教えています (ティト 2:13)」

100 大聖入からその後の増連禱を参照。

101 「我は主神の言わんとする所を聴かん、彼は平安を其の民と其の選びし者に謂わん (聖詠 84:8)」

102 「爾の光と爾の眞実とを遣わし (聖詠 43:3)」 「神は慈憐と其の眞実とを遣わさん (聖詠 57:3)」

天主經

司祭 (高声) 主宰や、我等に、勇を以て、罪を獲ずして、敢て爾 天の神・父をよびて言うを賜え¹⁰³、

衆人 天に在す我等の父や、¹⁰⁴

願わくは爾^{なんじ}の名は聖とせられ、

爾^{なんじ}の国は来たり、

爾^{なんじ}の旨は天に行わるるが如く^{ごと}地にも行われん、

我が日用の糧^{かて}を 今日我等に与え給え、

我等に債^{おいめ}ある者を我等免^{ゆる}すが如く、我等の債^{おいめ}を免^{ゆる}し給え、

我等を誘^{いざない}に導かず、なお我等を凶悪より救い給え、

司祭 蓋国と権能と光榮は爾^{なんじ}父と子と聖^{せいしん}神に帰す、今も何時も世世に、

(詠) 「アミン」

司祭 衆人に平安、

(詠) 爾^{なんじ}の神にも、

輔祭 爾等の首を主に屈めよ、

(詠) 主爾^{なんじ}に、

司祭

見るべからざる王、その量り難き能力を以て萬有を画定し、その慈憐の多きを以て万物を無より有となし主や、我等爾に感謝す、主宰や、爾親^{みづか}ら爾に首を屈めし者を天より顧み給へ¹⁰⁵、蓋血肉に屈めしに非ず、すなわち爾畏るべき神に屈めり、故に主宰や、爾はここにそなへたる者を、我等衆人の善のために、各人の必要に応じて等しく頒ち、航海する者と偕^{とも}に航海し、旅行する者と偕^{とも}に旅行し、霊体の医師として、病を患うる者をいやし給へ、

¹⁰³ 「また、あなたがたは、人それぞれの行いに応じて公平に裁かれる方を、「父」と呼びかけているのですから、この地上に仮住まいする間、その方を畏れて生活すべきです (1 ペテロ 1:17)」

¹⁰⁴ 弟子たちがどのように祈ればいいのかとたずねたとき、イエスは「天主經 (主の祈り)」と呼ばれる祈りを教えられた (マタイ 6:9-13、ルカ 11:2-4) 私たちは全員が和して、キリスト教の教会の最も力強い祈りを唱える。初代教会では天主經は洗礼を受けて神の子となったものにしにしか教えられなかった。

¹⁰⁵ 「彼らは主を賛美して喜び祝い、ひざまずいて礼拝した (2 歴代誌 29:30)」

司祭 (高声) 爾が独生子の恩寵と慈憐と仁愛とに因りてなり、爾は彼と至聖至善にして生命^{いのち}を施す爾の神と偕に讃揚せらる、今も何時も世世に、

(詠) 「アミン」

司祭

主イイス・ハリストス我等の神や、爾の聖なる住所と爾が国の光栄の宝座より眷りみ給へ、上には父と偕に坐し、ここには見えずして我等と偕に居る者や、来りて我等を聖にし、爾の権能の手を以て、爾が至浄の体と至尊の血とを我等に授け、又我等を以て衆人に授け給へ¹⁰⁶、神や我罪人を浄めて、我を憐み給え、

(輔祭王門の前に立ってオラリを十字形に結ぶ、司祭及び輔祭定位置に立って躬拝三次、毎次黙誦して)

(輔祭は王門の前で絵オラリを十字形に身につけ、躬拝3次「我罪人を浄めて、我を憐み給へ」司祭が両手を伸ばして聖パンを高くかかげるのを見て、)

輔祭 謹みて聴くべし、

司祭 (司祭聖ポテリアルを挙げて、高声) 聖なる物は聖なる人に¹⁰⁷、

(詠) 聖なるはただひとり、主なるはただひとり、神・父の光栄を顕すイイス・ハリストスなり、「アミン」¹⁰⁸

領聖詞¹⁰⁹

主日領聖詞 (第148聖詠より)¹¹⁰

(詠) 天より主を讃め揚げよ、至と高きに彼を讃め揚げよ
ア ril l i ya、a ril l i ya、a ril l i ya

誦経 天より主を讃め揚げよ、至高きに彼を讃め揚げよ。

その悉くの天使よ、彼を讃め揚げよ、その悉くの軍よ、彼を讃め揚げよ。

日と月よ、彼を讃め揚げよ、悉くの光る星よ、彼を讃め揚げよ。

諸天の天と天より上なる水よ、彼を讃め揚げよ。

主の名を讃め揚ぐべし、蓋彼言いたれば、即ち成り、命じたれば、即ち造られたり、

彼は之を立てて世々に至らしめ、則を与えて之を躰えざらしめん。

地より主を讃め揚げよ、

¹⁰⁶ 正教会はハリストスの体と血を領けることこそが聖なることで、力あること考える。(ヘブル 6:4-6)

¹⁰⁷ 「聖なるものは聖なる人に」聖人は神の聖なる者である。洗礼の約束によって生きる努力をするものはご聖体を領ける。

¹⁰⁸ 「すべての舌が、『イエス・キリストは主である』と公に宣べて、父である神をたたえるのです(ピリピ 2:11)」

¹⁰⁹ 神品領聖を待つ間、領聖詞など、領聖に備えるにふさわしい歌を歌う。主日領聖詞では「天より主を讃め揚げよ」を歌い、誦経が148聖詠の第1句を唱える。また、「天より主を」を歌い、誦経が第2句を唱える。こうして、聖詠の句の間に歌をはさみ、神品領聖が終わるまで繰り返す。最後にア ril l i ya を続けて歌う。

¹¹⁰ 主日の領聖詞は148聖詠の1。祭日は祭日経に指示される。

大魚とことごと悉くの淵（主を讃め揚げよ）、
 火と霰、雪と霧、主の言ことばに従う暴風（主を讃め揚げよ）、
 山と悉くの陵、果物の樹と悉くのはくこうぼく柏香木（主を讃め揚げよ）、
 野獣と諸々の家畜、葡萄物と飛ぶ鳥（主を讃め揚げよ）、
 地の諸王と萬民、牧伯と地の諸有司、少年と處女、翁と童は、主の名を讃め揚ぐべし、
 蓋、惟その名は高く挙げられ、その光榮は天地にあまね遍し。
 彼はその民の角を高くし、その諸聖人、イズライリの諸子、彼に親しき民の榮えを高くせり

領 聖

神品領聖

輔祭 （輔祭は、司祭の右に立つ。司祭は聖パンをとる）君や、聖餅さを割けよ
 司祭 （恭しくパンを、四分して）神の羔は割かれ分たる、彼は割かれて分離せず、恒に食はれて永く盡きず、すなわち領くる者を聖にす
 輔祭 （オラリで聖ポティールを指して）君や、聖爵を充滿せよ、
 司祭 （ICの文字の書かれた羔のパンをとって、聖ポティールの上に十字を画して、）聖神の充滿、（聖爵の中に置く）、
 輔祭 「アミン」（温水をとって司祭に向って）君や、温水に祝福せよ、
 司祭 （祝福して）爾が諸聖人の温熱は恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、「アミン」
 輔祭 （温水を十字形に聖ポティールに注いで）信の温熱は聖神を以て充滿す「アミン」（温水の器を置いて少し下がって立つ）、
 司祭 輔祭近づけよ、（輔祭前に進み、恭敬叩拝してその罪を赦すを求め、司祭聖パンを取って輔祭に授ける。輔祭司祭の手に接吻してご聖体のパンを受ける）
 輔祭 君や、我に主・神我等の救世主イイスス・ハリストスの至尊至聖なる体を授けよ、
 司祭 主・神我等の救世主イイスス・ハリストスの至尊至聖至浄なる体、（某）輔祭に授けらる、その罪の赦しと永生とを得んがためなり¹¹¹、（輔祭は後に退き首を屈め『領聖祝文』を祈る）
 司祭 （司祭もご聖体のパンを取って）主・神我等の救世主イイスス・ハリストスの至尊至聖なる体、我（某）司祭に授けらる、我が罪の赦しと永生とを得んがためなり、（『領聖祝文』を祈る）（司祭輔祭手にとって聖体を領ける。司祭立って、両手に赤い布で聖ポティールをとり、三度に飲んで、）主神我等の救世主イイスス・ハリストスの至尊至聖なる血を、我神の僕司祭（某）領く、我が罪の赦と永生とを得んがためなり、「アミン」（赤い絹布で口及び聖ポティールの辺を拭って）
 視よ、これ我の口に触れたり、すなわち我が不法を除き、我が罪を浄めんとす、
 司祭 輔祭近づけよ、
 輔祭 （近づいて叩拝一次）夫れ我は吾が死せざる王及び神に就く、
 司祭 神の僕 輔祭（某）、主・神我等の救世主イイスス・ハリストスの至尊至聖なる血を領く、其罪の赦と永生とを得んがためなり、（輔祭聖血を領ける）
 司祭 視よ、これ爾の口に触れたり、すなわち爾が不法を除き、爾が罪を浄めんとす、
 （司祭 Ni Kaの文字の描かれたものを領聖者の数に分け聖ポティールの中に入れる。）
 （王門を開き輔祭聖ポティールを受け、挙げ、衆人に示して）

信徒領聖

司祭 神を畏るる心と信とを以て、近づき来たれ¹¹²、

（詠）主の名に依よって来たる者は崇め讃めらる、主は神なり、我等を照らせり¹¹³

¹¹¹ 「イエスが言われた。『それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか』 シモン・ペトロが、『あなたはメシア、生ける神の子です』と答えた（マタイ 16:33）」

「従って、ふさわしくないままで主のパンを食べたり、その杯を飲んだりする者は、主の体と血に対して罪を犯すこととなります。…… 主の体のことをわきまえずに飲み食いする者は、自分自身に対する裁きを飲み食いしているのです（1コリント 11:27-28）」

¹¹² 「心は清められて、良心のとがめはなくなり、体は清い水で洗われています。信頼しきって、真心から神に近づこうではありませんか（ヘブル 10:22）」

¹¹³ 「主の名に依りて来る者は崇め讃めらる（聖詠 117:26）」

領聖祝文

主や我信じ、且つ承け認めて、爾を実にハリストス生活の神の子、罪人を救うがために世
に來りし者となす、衆罪人のうち我第一なり、
また信ず、これはすなわち爾が至淨の体、これはすなわち爾が至尊の血なりと、ゆえに
爾に祈る、我を憐み、我が自由と自由ならずして、言と行いにて、知ると知らずして、
犯しし諸罪を赦し給え、
並びに我に定罪なく、爾が至淨なる機密を領けて、罪の赦しと永生とを得るをいたさせ給
え「アミン」
神の子や、今我を爾が機密の筵に與る者として容れ給え、蓋我爾の仇に機密を告げざ
らん、
又爾にイウダの如き接吻を為さざらん、すなわち右盜の如く爾を承け認めて曰う、主や、
爾の國に於いて我を記憶せよと¹¹⁴、主や、祈る爾の聖なる機密を領くるは、我がために
審案或は定罪とならず、すなわち靈体の醫とならんことを¹¹⁵、

復活の領聖詞¹¹⁶

(詠) ハリストスの聖体を領け、不死のいづみを飲めよ、¹¹⁷
ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ

司祭 神の僕(婢)(某)、主・神我等の救世主イイス・ハリストスの至尊至聖なる体血を領く、その罪の赦しと永生
とを得んがためなり(信徒領聖者は恭しく叩拝して両手を胸の前に交差し領聖する。赤布で口を拭い聖ポティールに接吻しき、退いて口す
すぎのワインとパンを頂く)

(領聖後、司祭者が至聖所にもどり聖ポティールを宝座に返す。輔祭は聖ディスコス聖ポティールの上に傾け、聖体の分及び他の諸分を中に入れ
る、復活の讃歌を誦す。)

ハリストスの復活を見て、聖なる主イイス・独り罪なき者を拝むべし、ハリストスや、我等爾の十字架を拝み、
爾の聖なる復活を歌い讃む、爾は我等の神なればなり、爾の外他の神を知らず、唯爾の名を称う、信者や、皆來
りてハリストスの聖なる復活を拝むべし、十字架にて喜は全世界に臨めばなり、我等恒に主を讃め揚げて、其復
活を崇め歌わん、主は十字架に釘うたるを忍びて、死を以て死を亡しによる、
新なるイエルサリムや、光り光れよ、主の光榮爾に輝けばなり、シオンや、今祝いて樂めよ、爾も潔き生神女や、

¹¹⁴ イエスは言われた。「はっきり言うておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。
わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。わたしの肉はま
ことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの
内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。……わたしを食べる者もわたしによって生きる。……このパンを食
べる者は永遠に生きる(イオアン 6:53)」司祭は成聖された主のパンと血を皆に分ける準備をする。

¹¹⁵ ものいみと良心の省みと悔い改めによって準備した者だけがポティールに近づく。洗礼を受け、膏つけられ、正教会
の教義を受け入れたクリスチャンが教会の交わりに入る。

「書き記せ。小羊の婚宴に招かれている者たちは幸いだ(黙示 19:9)」

「するとセラフィムのひとりが、わたしのところに飛んで来た。その手には祭壇から火鉢で取った炭火があった。彼はわ
たしの口に火を触れさせて言った。『見よ、これがあなたの唇に触れたのであなたの咎は取り去られ、罪は赦された』(イ
ザヤ 6:6-7)」

¹¹⁶ 本来復活祭の領聖詞だが、日本では一般的に領聖時に歌われている。

¹¹⁷ 「我何を以て主の我に施し悉くの恩に報いん、我救いの爵を受けて、主の名を呼ばん(聖詠 116:12-13)」
「味わえよ、主の如何に仁慈なるを見ん(聖詠 33:8)」

爾が生みし主の復活を歎き給え、

嗚呼大にして至聖なる「パスハ」ハリストスや、嗚呼智慧と神の言と能力や、爾が国の暮れざる日に於て、我等になお親く爾を領けさせ給え、

(海綿で聖ディスコスに凝ったパンを拭って聖ポティールに入れる) 主や、爾が至尊の血を以て、爾が諸聖人の祈祷に因りて、ここに記憶せられし者の諸罪を滌い給え¹¹⁸、(袱で聖ポティールを覆い、星架と他の袱とを聖ディスコスの上に置く。司祭は感謝の祝文を黙誦、)

人を愛する主宰、我が^{たましい}霊の恩主や、我等に、この日に於ても、爾が天上の不死の機密を領けさせ給いしを爾に感謝す、我等の途を直くし、我等衆人を爾を畏るの畏れに堅固にし、我等の^{いのち}生命を^{まも}護り、我等の歩みを固め給え、^{しょうしんえいでいどうじよ}光栄なる生神女永貞童女マリヤ及び爾が諸聖人の祈りと願いとに因りてなり

感謝の祈りと退出

司祭 (衆に祝福し、高声) 神や、爾の民を救い、及び爾の嗣業に福を降せ¹¹⁹、

(司祭輔祭宝座に向い炉儀3次、黙唱) 神や、願くは爾は諸天の上に挙げられ、爾の光栄は全地を蔽はん、

(詠) 我等 ^みすでに真の光を^{せいしん}観、天の聖神を受け、正しき信を得て、分れざる
聖三者を拜む、彼我等を救い給えばなり、¹²⁰

(司祭聖ディスコスを輔祭の頭上に置く。輔祭これを受けて王門に向い、奉献台に聖ディスコスを安置する。司祭躬拝して聖ポティールをとって、転じて王門に至り会衆を向かって黙誦する。) 我等の神は恒に崇め讃めらる、

司祭 (高声) 今も何時も世世に、

(詠) 「アミン」主や、願くは我が口は^{さんび}讚美に満てられて¹²¹、我等爾の光栄を
歌わん、^{なんじ}爾我等に、神聖にして不死なる^{いのち}生命を^{なんじ}施す^{きみつ}爾の聖なる機密を
領くるを許せばなり、祈る我等を爾の成聖に^{まも}護り、終日爾の義を習わ
しめ給え¹²²、「ア ril イヤ」「ア ril イヤ」「ア ril イヤ」

輔祭 (北門を出で、王門前で) 謹みて立て、神聖・至浄・不死にして^{いのち}生命を施す天上の畏るべきハリストスの聖機密を領けて、宜しく主に感謝すべし¹²³、

(詠) 主憐めよ

輔祭 神や、爾の恩寵を以て我等を^{たす}助け救い^{まも}憐み護れよ、

(詠) 主憐めよ、

輔祭 此の日の純全・成聖・平安・無罪ならんことを求めて、我等己の身及び互に各の身を以て、并
に^{ことごと}悉くの我等の^{いのち}生命を以て、ハリストス神に委託せん¹²⁴、

(詠) 主爾に

(司祭アンティミンスを畳んで福音経を持ち、アンティミンス上に十字を描き、高声)

118 「これを飲んで成長し、救われるようになるためです (2ペテロ 2:3)」「御子イエスの血によってあらゆる罪から清められます (1イオアン 1:7)」

司祭はポティールを宝座に戻し、聖祭品の残りを食べつくす。

119 「爾の民を救い、爾の業に福を降し (聖詠 26:9)」

120 復活祭期は「ハリストス死より復活し」1次

領聖後の歌は参拝した信徒全員が領聖することが前提となっていることに注意。

「蓋爾の慈憐は天より高く (聖詠 108:5)」

121 「我が口は讚美に満てられて」この歌も全員が領聖したことを表す。

122 「あなたは食べて満足し、良い土地を与えてくださったことを思つて、あなたの神、主をたたえなさい (申命記 8:10)」

123 「我讚揚の祭を爾に献げて、主の名を呼ばん(聖詠 116:7)」

124 「わたしはこの子を授かるようにと祈り、主はわたしが願ったことをかなえてくださいました (1サムエル 1:27)」

司祭 蓋爾は我等の成聖なり、我等光栄を爾父と子と聖神^{せいしん}に献ず、今も何時も世世に¹²⁵、

(詠)「アミン」

司祭 平安にして出づべし¹²⁶、

(詠)主の名に因りて、

輔祭 主に祷らん、

(詠)主憐めよ、

升壇外の祝文

司祭 爾を讃揚する者に福を降し、及び爾を恃む者を聖にする主や、爾の民を救い、及び爾の嗣業に福を降し、爾が教会の充滿を守り、爾が堂の美なるを愛する者を聖にせよ、爾が神聖の力を以て彼等を光栄し、及び我等爾を恃む者を遺す勿れ、爾の世界と爾の諸教会と諸司祭と、我がの天皇及び国を司る者及び爾の衆人に平安を賜え、蓋凡の善なる施、凡の全備なる賜は、上より、爾光明の父より降るなり、我等光栄・感謝・伏拝を爾父と子と聖神に献ず今も何時も世世に、¹²⁷

(詠) 願くは主の名は崇め讃められ(て)、今より世世に至らん(三次) ¹²⁸

(誦経 第三十三聖詠 「我何の時にも主を讃め揚げん云々」を誦する)

(升壇外の祝文を誦する時、輔祭王門の右、ハリストスの聖像の前に立ち、オラリをとって首を屈めて終わるのを待つ。)

(終わったら、司祭王門に入り、奉献台の前で、下の祝文を誦する)

聖物を食しつくす前の祝文

親^{みづか}ら法律と諸預言者との成満にして、父の定制^{ことごと}を悉く成満せしハリストス我が神や、常に我等の心を喜と楽とに成満せしめ給へ、今も何時も世世に、(輔祭北門より入って、ポティールのご聖体を食しつくす)

司祭 (高声) 願くは主の降福は、その其恩寵と仁愛とに因りて常に爾等に在らん¹²⁹、今も何時も世世に、

(詠)「アミン」

司祭 ハリストス神我等の恃みや、光栄は爾に帰す、光栄は爾に帰す¹³⁰、

(詠) 光栄は父と子と聖神^{せいしん}に帰す、今も何時も世世に「アミン」¹³¹
主憐めよ(三次) 福をくだけ、

司祭 ハリストス我等の眞の神は、其至浄なる母、光栄にして讃美たる聖使徒、我等の聖神父コンス

¹²⁵ 「主を其の憐れみと、其の人の諸子の為に行いし奇跡に縁りて讃栄すべし、蓋彼は其の渴ける霊を満たせ、飢うる霊を善き物に飽かしめたり(聖詠 106:8-9)」

「神よ、我等を憐れみ、我等に福を降し、爾の顔を以て我等を照らし給え、爾の途の地に知られ、爾の救いの萬民の中に知られん為なり(聖詠 67:1-2)」

¹²⁶ 「安心して行かれるがよい。主は、あなたたちのたどる旅路を見守っておられる(士師記 18:6)」 「安心して帰りなさい。イスラエルの神が、あなたの乞い願うことをかなえてくださるように(1サムエル 1:17)」

¹²⁷ 十字架接吻しアンティドールのパンを頂く。「いったいあなたの持っているもので、いただかなかったものがあるでしょうか(1コリント 4:7)」参照ヤコブ 1:17

¹²⁸ 「願わくは主の名は崇め讃められて今より世々に至らん(聖詠 113:2)」

¹²⁹ 「主の降福は爾等に帰すべし(聖詠 129:8)」 「爾等は天地を造りし主に降福せられたり(聖詠 115:15)」 「主があなたを祝福し、あなたを守られるように。主が御顔を向けてあなたを照らしあなたに恵みを与えられるように。主が御顔をあなたに向けてあなたに平安を賜るように(民数 6:24-25)」

¹³⁰ 発放(退出)ではもう一度神の聖人、特にその日の聖人を心に呼び戻す。

領聖しなかった者も愛のパンを頂くために近寄る。

¹³¹ 復活祭期は司祭の「ハリストス死より復活し」の前半に続いて、「墓に在るもの…」の後半を歌う。

タンティノポリの大主教金ロイオアン、聖（某）（本日聖人）及び諸聖人の祈祷に因りて我等を憐み救わん、彼は善にして人を愛する主なればなり¹³²、

萬壽詞

（詠）神よ、我が国の天皇を、及び国を司る者、
我等の（府）主教 _____
及び正教のハリストティアニン等を 幾とせにも護り給え。

金ロイオアンのトロパリ（8調）

爾が口の恩寵は火の光の如く輝きて全地を照し、世界のために無慾の実を得、我等のために謙遜の高きを顕せり、神父金ロイオアンや、なお 爾の言を以て訓えて、言なるハリストス神に我等の 靈^{たましい}の救われんことを禱り給え、

「光荣」

コンダク（6調）

至福にして克肖なる金ロイオアンや、爾は天より神聖の恩寵を受け、爾の口を以て、衆人に三位一体の神に伏拝するを訓う、我等宜しきに合いて爾を讃め揚ぐる、爾は神聖の事を顕す師なればなり、

「今も」

生神女讚詞

ハリストティアニン等の辱を得ざる転達、造物主の前に変らざる中保や、罪なる者の禱の声を退くる勿れ、仁慈なるに依りて、速に我等を助け給え、蓋我等切に爾に呼ぶ、生神女^{しょうしんじょ}や、爾を尊む者に常に代りて、急ぎて禱り、切に願ひ給え、



領聖感謝祝文

神や光荣は爾に帰す、神や、光荣は爾に帰す、神や、光荣は爾に帰す、

第一祝文

主我が神や、爾我罪人を棄てずして、尚爾の聖なる機密^{あずか}に 與る者と致させ給ふを爾に感謝す、我堪えざる者に爾が至浄なる天の 賜^{たまもの}を受くるを容し給うを爾に感謝す、主宰・人を愛する主、我等のために死して復活し、我が 靈^{たましい}と体とに恩を与え、之を聖にするがために、我等にこの恐るべくして生命^{いのち}を施す機密を賜いし者や、求む、この機密は、我にも 靈^{たましい}と体とを癒し^{いや}、凡その敵の書を駆り、我が心の目を明かにし、我が 靈^{たましい}の力を平安にし、恥を得ざる信とし、偽りなき愛とし、睿智^{えいち}を充たし、爾の誠めを守らしめ、爾が神聖の恩寵を益し、爾の国を嗣がしむる者となるを得せしめ給え、我はかくの如く、

¹³² 「焼き尽くす献げ物と和解の献げ物をささげ終わると、ダビデは万軍の主の御名によって民を祝福し、兵士全員、イスラエルの群衆のすべてに、男にも女にも、輪形のパン、なつめやしの菓子、干しぶどうの菓子を一つずつ分け与えた。民は皆、自分の家に帰って行った（2サムエル 6:18-19）」

この機密にて爾の成聖に護られ、常に爾の恩寵を思い、また己がために生活せず、すなわち爾我が主宰及び恩主のために生活し、以て、永生の望をいただき、この世を離れて、永遠の息、彼の祝する者の絶えざる声、及び爾が顔の言いつされぬ美善を見る者の限りなき楽の所に至らん、蓋ハリストス我が神や、爾は爾を愛する者の真の望と言い盡されぬ樂なり、凡そ造を受けし者は爾を世世に讚め歌う、「アミン」

第二祝文 聖大ワシリーの原文

主宰ハリストス神、萬世の王、萬物の造成者や、凡そ我に賜ひし所の諸善、且つ生命を施す至浄なる爾の機密を領けさせ給ひしを爾に感謝す、又爾に祈る、善にして人を愛する主や、我を爾が庇いの下に、爾が翼の蔭に護り、我に呼吸の絶えんとするに至るまで、潔き良心を以て、当然に爾の聖体聖血を領け、以て罪の赦しと永生とを得るを致させ給え、蓋爾は生命の糧、成聖の泉、諸善を賜う主なり、我等爾と父と聖神とに光榮を献ず、今も何時も世世に、「アミン」

第三祝文「メタフラスト」の原詩

我が造成主甘んじて己の身を糧として我に与え、火にして不当者を焚く者や、求む我を焚くなかれ、すなわち吾が百体諸節心腹に入り、吾が諸罪の救を焚き、靈を浄め、思を聖にし、筋と骨とを固め、五官を明かにし、吾が全身を、爾を畏るる畏れに釘うち、常に我を庇い、我を保ち、我を靈を害する諸の行いと**言**とより護り、我を浄め、我を滌ひ、我を飾り、我を治め、我を啓き、我を照し、我が復罪の住所たらずして、獨爾が聖神の住所たるを顕し、凡その悪者凡その慾は、我、聖体に入るに依りて爾の家となりし者より逃ぐる**こと**、火より逃ぐるが如くならしめ給え、我その転達者として、諸の聖者、諸品の神使、爾の前駆、智慧なる使徒及び爾が無玷至浄の母を爾に進む、慈憐の主我がハリストスや、彼等の祈祷を容れて、爾の役者を光の子となし給え、蓋、独り至善の主や、爾は我等の靈の成聖と光明なり、我等皆神と主宰に宜しき所の如く、日々に光榮を爾に献ず、

第四祝文

主イイスス・ハリストス我等の神や、願くは爾の聖体は、我がために永生となり、爾の尊血は、罪の赦とならん、願くはこの感謝の祭は、我がために喜悅と壮健と安楽とならん、又畏るべき爾が再度の降臨の時、我罪人に、爾が光榮の右に立つを得せしめ給え、爾が至浄の母と諸聖人との祈祷に依りてなり、

第五祝文 至聖生神女に捧ぐ

至聖なる女宰・生神女、吾が味みたる靈の光、吾が憑恃とおおいと避所と慰藉と歡喜や、爾が我堪へざる者に、爾の子の至浄の体、至尊の血を領くる者となるを得せしめ給ひしを爾に感謝す、猶祈る、真の光を生みし者や、吾が心の靈目を明にせよ、不死の泉を生みし者や、我罪に殺されたる者を生かし給え、慈憐なる神の慈愛の母や、我を憐み、吾が心に傷感と悲痛、吾が思に謙遜、吾が虜となりし意念に呼還しを賜ひ、我に呼吸の絶えんとするに至るまで、罪を獲ずして、至浄なる機密の成聖を受けて、靈とからだとの醫を得るを致し、ならびに我に痛悔と承け認めとの涙を与えて、生涯爾を歌頌讚榮せしめ給え、蓋爾は世世に讚美と光榮とを満ち被る、「アミン」